

R にる作業の自動化・効率化 -パッケージ活用術-

Toshikazu Masumura

2023-05-06

はじめに

誰でもそうだろうが、面倒くさい仕事はしたくない。というか、したくないことが面倒くさいのだろう。ニワトリかタマゴのような議論は別として、できることなら面倒な作業はしたくない。でも、しなければならぬのなら自動化したい。もちろんすべての仕事を自動化できるわけでもないし、作業内容によっては文章執筆のように自動化すべきでないこともある。

作業の自動化には、プログラミング言語を使うことが多い。自動化でよく使われる言語としては、Python がある。Python は比較的習得しやすい言語らしく、多くの人が使っている。自分自身も多少は Python を使えるものの、それよりも R の方が慣れている。できることなら (ほぼ) 全ての作業を R でやってしまいたい。そんなわけで、この文章では R を使った作業の自動化や効率化方法を紹介する。

基本的に独学でここまで来たので、我流のスクリプトや汚いコードが多くあると思われるがご容赦頂きたい。また、改善案をご教示いただければありがたい。

matutosi@gmail.com

R とは

R は、統計解析環境であるとともに、プログラミング言語である。プログラミング言語としては、やや特殊な文法をもっている。そのため、他の言語よりも好き嫌いが激しいと思われる。

特徴

プログラミング言語としての R が文法的に特殊な点では、代入での「<-」使用とパイプ (「%>%」や「|>」(R-4.1 以降)) を多用することが挙げられる。

他の多くのプログラミング言語では、代入には「=」を使用する。R でも「=」を使えるが、「<-」を好んで使う人が多いと思われる。少なくとも私はそうしている。理由を問われても特には思いつかないが、慣れていることや、コードを見た時にすぐに R だとわかるぐらいだろうか。実用的には、「=」を入力するよりも手間がかかるし面倒なはずであるが、すでに手が慣れてしまっている。

パイプを最初に見たときには違和感を覚えたが、使い始めるとクセになる。クセになるだけではなく、同じ変数名を何度も使ったり、中間の変数名を考えなくて良い点で優れている。第 1 引数を省略できるため、入力の手間が少ない。パイプだけの恩恵ではなく、tidyverse の利用も大きいのが、コードが簡潔になって、コードの使い回しもし易い。パイプにはこのような多くの利点がある。

他にも「::」がやたらと出てくることが、実行速度が遅いなど欠点もそれなりにある。そもそも完璧なプログラミング言語など存在せず、それぞれが利点・欠点を持っている。それぞれの得意な分野でうまく使うことが重要である。とはいいいながら、多くのプログラミング言語を習得するのは困難である。私はこれまでちょっとだけでもかじったことのある言語としては、FORTRAN, Perl, Ruby, C, C++, VBA, Java, Python, JavaScript, R などがある。それぞれなんとなく読むことはできるが、実際によく使うのは R だけである。JavaScript はその次に使っているが、頻度は非常に低い。Python は勉強中である。

1 点突破

プログラミング言語にはそれぞれ得意分野があることは確かだが、垣根を超えて使うことはできる。例えば、R から Python を使うパッケージとして `reticulate` があり、Python から R を使うパッケージとして `rpy2` がある。つまり、1 つのプログラミング言語でしか実行できないものはほとんどなく、使いたい言語を使って勉強したい言語を勉強すれば良い。

汎用的なプログラミング言語としては、Python、C、C++、Java が、Web 関連では JavaScript が広く使われている。R の総本山である CRAN には、他にも様々なパッケージがあり、これらの言語に関連した多くの道具が揃っている。そのため、R を通してこれらの言語やそれに含まれるパッケージを利用することは可能である。多くの言語を習得するのも良いが、習得にはかなりの時間が必要である。いっそのこと 1 つの言語をある程度極めて、そこから使えるものは使うのも良い方法と言えるだろう。つまり一点突破の手法である。そこで、R のパッケージを使って、各種操作をすることを目的にこの文章を執筆した (している)。

もちろんだが、エラーが出たときの対処やより良い利用のためには、それぞれの言語のことを少しは知っておいた方が良い。場合によっては、R 以外の言語でコードを書く方が良い場合もある。例えば、私自身の例としては、編集距離を計算するコードを C で書いたことがある。正直なところは C で書いたというよりも、ネットで元になるコードを探して、多少アレンジしただけである。編集距離は、植物の学名や和名の間違い候補を提案するための関数を作成するために必要であったが、R での実装では実行速度に問題があった。そのため、部分的に C で書いてそれをパッケージ `Rcpp` を利用して自作のパッケージに組み込んだ。このような利用は実際の R のパッケージでも多く採用されており、R 本体や各種パッケージの多くの関数は C や C++ で実装されている。

結局のところ、表面的には R を使っているけど、他の言語のお世話になっていることは多い。R だけを勉強してもかなりのことはできるし、他の言語であっても結局は同じようなことが言える。R にかぎらず自分の得意とする言語を深く勉強するとともに、他の言語も少し知っておくのが良いだろう。

充実したヘルプ・ドキュメント

R にはヘルプ・ドキュメントがしっかりしているというのも非常に良い。ヘルプは、「? 関数名」として R から直接呼び出すことができ、関数の引数、返り値、使用例などが詳しく解説されていることが多い。ユーザーとしてはいちいちネットや書籍で調べなくても良いのが心強い。パッケージの開発者としては、既存のパッケージのドキュメントがしっかりしているため、それに合わせるべくしっかりとしたドキュメントを書かなければならないという圧力はあることは事実である。ただ、ドキュメントをしっかり作っておかないと、開発者も関数の使い方を忘れてしまうことになりかねないため、結局は「他人のためならず」である。

R のインストール

R のインストール方法は、ネットでも多く掲載されている。ここでは、オプションの個人的な好みを強調しつつ説明する。

ダウンロード

OS に合わせたインストーラをダウンロードする。Windows の場合は、「Download R-4.x.x for Windows」(x はバージョンで異なる) をダウンロード。

<https://cran.r-project.org/bin/windows/base/>

インストーラの起動

ダウンロードしたファイルをクリック。「…許可しますか?」に対して、「はい」を選択。

- インストール中に使用する言語
何でも大丈夫なので、好きなものを選ぶ。

- インストールの確認
「次へ」をクリック。
- インストール先のフォルダ
そのまま OK. 好みがあれば変更する。
- インストールするもの

とりあえず、すべてチェックしておくくと良い。Message translation は、R からのメッセージを日本語に翻訳するかどうか。チェックを入れないと、英語のみの表示。

結論としては、とりあえずチェックを入れておき、必要に応じて英語で表示させるという方法が良いかもしれない。チェックを入れておくと、エラーメッセージなどを日本語で表示させることができる。「そら日本語のほうが良いやん」と思うかもしれない。よくわからないエラーメッセージがしかも英語で表示されたら、わけがわからないからです。ただ、プログラミングの世界では、英語でのエラーメッセージのほうが便利なのが結構ある。それは、エラーメッセージをそのままネットで検索するときである。日本語でのエラーメッセージだとネット上の情報が限られる。一方、英語でのエラーメッセージで検索すると、原因や対処方法をかなりの確率で知ることができる。

```
# https://cell-innovation.nig.ac.jp/SurfWiki/R\_errormes\_lang.html
Sys.getenv("LANGUAGE") # 設定の確認
# 設定の変更方法
Sys.setenv(LANGUAGE="en") # 英語に変更
Sys.setenv(LANGUAGE="jp") # 日本語に変更
```

- オプションの選択

とりあえず「Yes」を選択。以下のオプションを選択するかどうか。

- ウィンドウの表示方法 (MDI / SDI) の選択

個人的な好みは SDI ですが、好みの問題ですので正直どちらでも大丈夫。MDI(左) は大きな 1 つの Window の中に、コンソール (プログラムの入力部分)、グラフ、ヘルプなどが表示される。SDI(右) はコンソール、グラフ、ヘルプが別々の Window として表示される。どちらかといえば、自由度が高い。

- ヘルプの表示方法 (Plain text / HTML help) の選択

個人的な好みは Plain text だが、好みの問題で正直どちらでも構わない。Plain text はテキストファイルで表示されるシンプルな作り。HTML help はヘルプがブラウザ (GoogleChrome 等) で表示される。関連する関数などへのリンクが表示されるので、それらを参照するのは便利。

- その後の設定

その他は、既定値 (そのまま) で OK。

インストール完了

インストールが完了すると、アイコンがデスクトップに表示される。

アイコンをクリックすると、R が起動する。

パッケージのインストール

R 単体でも多くの機能があるものの、実際には各種パッケージを利用することが多い。パッケージのインストールには、R で簡単なコマンドを実行するだけである。

多くのパッケージが、R の総本山である CRAN に登録されている。 <https://cran.r-project.org/>

CRAN に登録するには、それなりに厳しいチェックがある。ただし、私自身でも登録できていることが証明しているが、CRAN に登録されたからといってバグが無いわけではない。そのため R 本体もそうだが、R のパッケージも利用はあくまで自己責任が基本である。

CRAN に登録されたパッケージの開発バージョンは、GitHub で公開されていることが多い。また、CRAN には登録されず GitHub のみで公開されているパッケージも存在する。

CRAN から

CRAN では R 本体だけでなく、各種パッケージが公開されている。

https://cran.r-project.org/web/packages/available_packages_by_name.html

CRAN に登録されたパッケージで名前がわかっていたら、以下のようにすればインストールできる。

```
# ミラーサイト (ダウンロード元) の設定
options(repos = "https://cran.ism.ac.jp/")
# 1つの場合
install.packages("tidyverse")
# 複数の場合
pkg <- c("xlsx", "magrittr", "devtools")
install.packages(pkg)
```

実行すると、ファイルをダウンロードし、成功 (あるいは失敗) したことが表示される。

GitHub から

たいていは CRAN に登録されているが、GitHub にしかないパッケージもある。その場合には、以下のようにする。

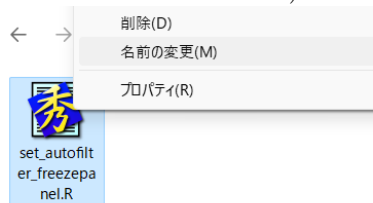
```
install.packages("devtools")
devtools::install_github("matutosi/ecan")
```

スクリプトの関連付け

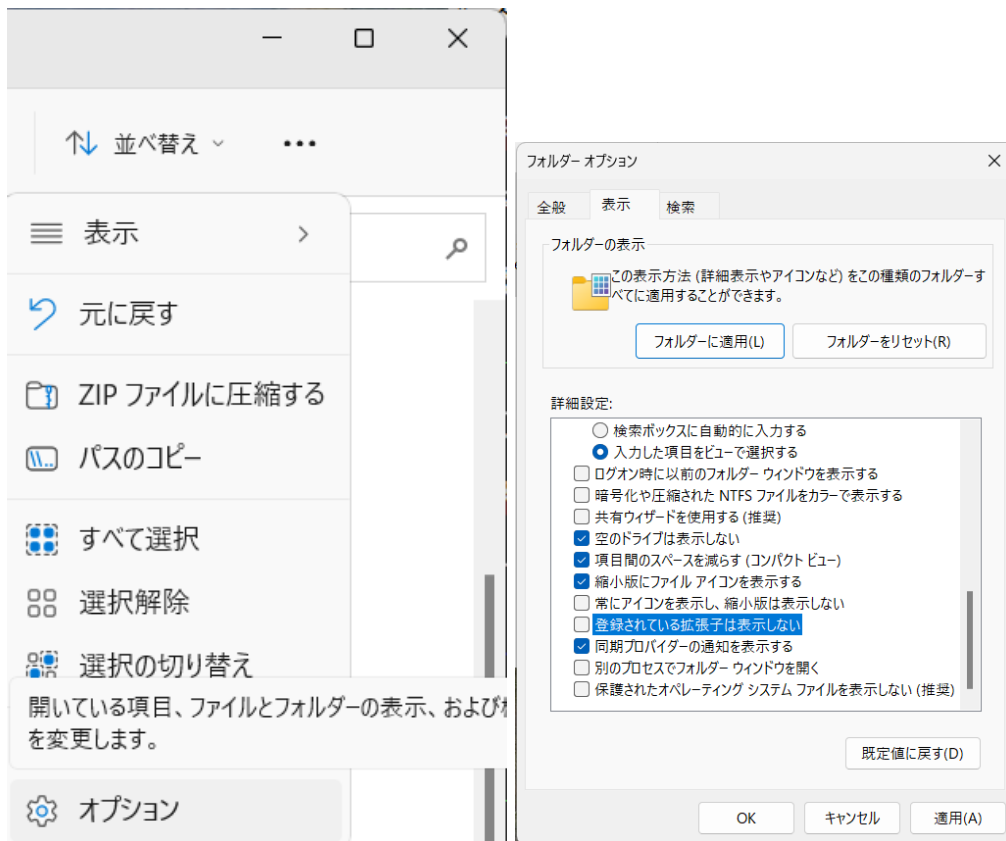
R のプログラムのファイルは拡張子「script.R」のように「R」という拡張子を付けて保存することが多い。「.docx」をワードで、「.xlsx」をエクセルで開くと同様に、私は「*.R」をテキストエディタで開くように設定している。その後、開いたファイルを R のコンソールに貼り付けて、プログラムを実行する。

このような使い方でももちろん良いのだが、内容を変更しないのであれば面倒臭い。つまり、ファイルをクリックするだけで、プログラムが実行されれば便利である。プログラムを R に関連付けれることで、これが実現できる。

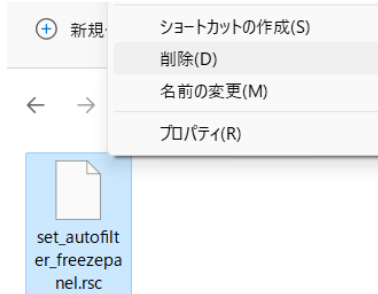
1. プログラムのファイル名を「.R」から「.scr」に変更する (「scr」は大文字小文字は関係なく、「Rsc」や「RSC」などでも OK)。



2. 拡張子が表示されていない場合は、エクスプローラの表示のオプションで、「登録されている拡張子は表示しない」のチェックを外して (チェックしないで)、「OK」を選択してから、名前を変更する。



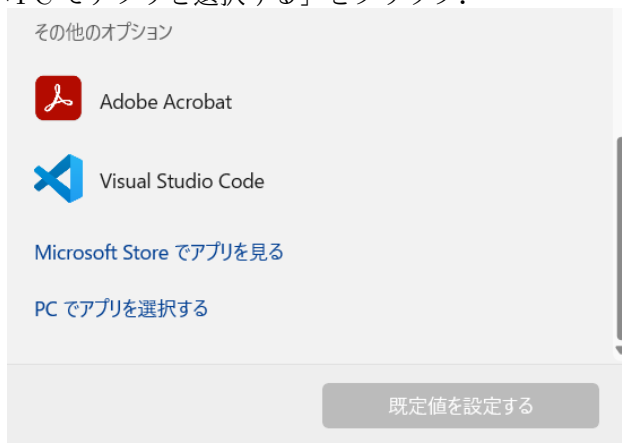
3. ファイルを右クリックして、「プロパティ」を選択。



4. 「全般」タブのやや上にあるプログラムの「変更」を選択。



5. 「PC でアプリを選択する」をクリック。

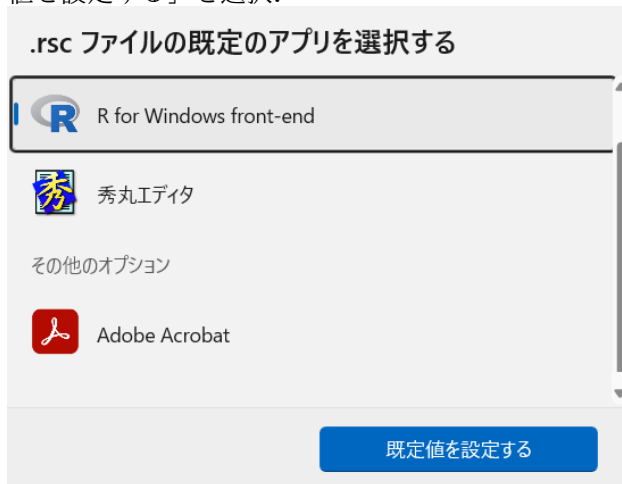


6. ファイル選択画面で、R をインストールしたフォルダまで辿っていき (「c:\Program files\R\R-4.2.3\bin\x64」など), 「Rscript.exe」を選択する。

> PC > Windows (C:) > Program Files > R > R-4.2.3 > bin > x64

名前	更新日時	種類	サイズ
Rterm.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	88 KB
RSetReg.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	88 KB
Rscript.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	92 KB
Rgui.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	86 KB
Rfe.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	104 KB
Rcmd.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	102 KB
R.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	103 KB
open.exe	2023/03/15 14:52	アプリケーション	17 KB

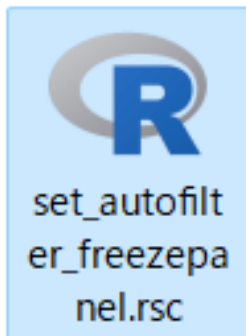
7. 「.rsc ファイルの既定のアプリを選択する」で「R for windows front-end」が表示されるので、「既定値を設定する」を選択。



8. 全般タブのプログラムが「R for windows front-end」になっていることを確認して、「OK」を選択。



9. ファイルのアイコンが R のアイコンになったら OK.



ダブルクリックすると、ファイルの内容が実行される (はず).

magrittr でコードを簡潔に

パッケージ magrittr はちょっと変わっている.

そもそも名前が変わっていて何と読んで良いのか分からない. 公式ページには「magrittr (to be pronounced with a sophisticated french accent)」と書かれている. フランス語は、大学の第2外国語で習ったが、すでに記憶の彼方に沈んでしまっている.

主な関数がパイプ(`%>%`)である点もちょっと変わっている。ただし、パイプ以外にもパイプとともに使うと便利な関数も含まれている。例えば、`set_colnames()` はデータフレームの列名を変更する時に便利だ。パイプを使ったコードの途中で列名を変更するために、`<- colnames()` でコードを区切るのは面倒である。`# <- colnames` できる? `# [<-` また、`set_colnames()` 以外にも、`dplyr` の `rename()` や `select()` で列名を変更する方法もある。

```
hoge <- colnames(c("foo", "bar"))
hoge %>%
  magrittr::set_colnames(c("foo", "bar")) %>%
  dplyr::filter(...)
```

`magrittr` に含まれる関数たちで、どんな内容か気になるものの一覧

```
export("n'est pas")
export(add)
export(and)
export(equals)
export(not)
export(or)
export(pipe_nested)
export(set_colnames)
export(use_series)
```

tidyverse と magrittr

`tidyverse` は、R でのデータ解析には欠かせないものになっている。そこで、R を起動時に `tidyverse` を読み込む人は多いだろう。なお、`tidyverse` は 1 つのパッケージではなく、複数のパッケージからなるパッケージ群である。

```
library(tidyverse)
```

`tidyverse` のパッケージ群を読み込んだときや、そのうちの個別のパッケージ (`forcats`, `tibble`, `stringr`, `dplyr`, `tidyr`, `purrr` など) を読み込むと、`%>%` (パイプ) を使うことができる。私は `%>%` が `tidyverse` の独自のものと勘違いをしていた。しかし、`%>%` はもとはパッケージ `magrittr` の関数であり、そこからインポートされている。そのため、`tidyverse` を読み込むと使うことができる。`%>%` は、慣れるまでは何が便利なのか分からないが、慣れると欠かせなくなる。さらに使っていると、癖なってしまって無駄にパイプを繋ぐこともある。長過ぎるパイプは良くないのは当然であるものの、適度に使うと R でのプログラミングは非常に楽になる。

`tidyverse` の関数では、引数とするオブジェクトが統一されている。具体的には、第 1 引数のオブジェクトがデータフレームや `tibble` になっていることが多い。そのため、パイプと相性が特に良い。

`%>%` とその仲間

`%>%` の仲間としては、以下の関数もある。

- `%<>%`
- `%T>%`
- `%%$%`

これらの関数は、`tidyverse` には含まれていないため、使用するには `magrittr` を読み込む必要がある。`%>%` と同じように使うことができるが、役割がそれぞれ違う。

```
library(magrittr)
```

```
##
## Attaching package: 'magrittr'
```

```
## The following object is masked from 'package:purrr':
##
##   set_names
##
## The following object is masked from 'package:tidyr':
##
##   extract
```

%<>%

%<>% は、パイプを使って処理した内容を、最初のオブジェクトに再度代入するときに使う。ほんの少しだけ、コードを短くできる。

head(mpg) # 燃費データ

```
## # A tibble: 6 x 11
##   manufacturer model displ  year   cyl trans      drv   cty   hwy fl   class
##   <chr>          <chr> <dbl> <int> <int> <chr>    <chr> <int> <int> <chr> <chr>
## 1 audi          a4      1.8  1999     4 auto(l5)  f      18    29 p   compa~
## 2 audi          a4      1.8  1999     4 manual(m5) f      21    29 p   compa~
## 3 audi          a4      2    2008     4 manual(m6) f      20    31 p   compa~
## 4 audi          a4      2    2008     4 auto(av)   f      21    30 p   compa~
## 5 audi          a4      2.8  1999     6 auto(l5)  f      16    26 p   compa~
## 6 audi          a4      2.8  1999     6 manual(m5) f      18    26 p   compa~
```

```
tmp <- mpg
tmp <-
  tmp %>%
  dplyr::filter(year==1999) %>%
  tidyr::separate(trans, into=c("trans1", "trans2", NA)) %>%
  head() %>%
  print()
```

```
## # A tibble: 6 x 12
##   manufacturer model      displ  year   cyl trans1 trans2 drv   cty   hwy fl   class
##   <chr>          <chr>    <dbl> <int> <int> <chr>  <chr>  <chr> <int> <int> <chr> <chr>
## 1 audi          a4      1.8  1999     4 auto    15    f      18    29 p   compa~
## 2 audi          a4      1.8  1999     4 manual  m5    f      21    29 p   compa~
## 3 audi          a4      2.8  1999     6 auto    15    f      16    26 p   compa~
## 4 audi          a4      2.8  1999     6 manual  m5    f      18    26 p   compa~
## 5 audi          a4 quatt~  1.8  1999     4 manual  m5    4      18    26 p   compa~
## 6 audi          a4 quatt~  1.8  1999     4 auto    15    4      16    25 p   compa~
## # i 1 more variable: class <chr>
```

```
tmp <- mpg
tmp %<>%
  dplyr::filter(year==1999) %>%
  tidyr::separate(trans, into=c("trans1", "trans2", NA)) %>%
  head() %>%
  print()
```

```
## # A tibble: 6 x 12
##   manufacturer model      displ  year   cyl trans1 trans2 drv   cty   hwy fl   class
##   <chr>          <chr>    <dbl> <int> <int> <chr>  <chr>  <chr> <int> <int> <chr> <chr>
## 1 audi          a4      1.8  1999     4 auto    15    f      18    29 p   compa~
## 2 audi          a4      1.8  1999     4 manual  m5    f      21    29 p   compa~
## 3 audi          a4      2.8  1999     6 auto    15    f      16    26 p   compa~
```

```
## 4 audi          a4          2.8 1999      6 manual m5      f          18    26 p
## 5 audi          a4 quatt~    1.8 1999      4 manual m5      4          18    26 p
## 6 audi          a4 quatt~    1.8 1999      4 auto    15      4          16    25 p
## # i 1 more variable: class <chr>
```

注意点としては、試行錯誤でコードを書いている途中は、あまり使わないほうが良いだろう。もとのオブジェクトが置き換わるので、処理結果が求めるものでないときに、もとに戻れなくなってしまう。コードを短くできるのは1行だけで、可読性が特に高くなるというわけでもない。便利なことは便利で、私も一時期はよく使用していた。しかし、上記の理由もあって、最近はほとんど使用していない。

%T>%

処理途中に分岐をして別の処理をさせたいときに使う。例えば、ちょっとだけ処理して、変数に保存するときに使う。imap と組み合わせて、保存する画像のファイル名を設定する時に使うと便利である。

%T>% は便利ではあるが、以下の点で注意が必要である。 - 分岐途中の結果をオブジェクトに代入するときには、<-ではなく、<<-を使う - 明示的に「」を使う - 複数処理があれば、「{ }」で囲う - 処理終了後に「%>%」が必要

例のコードを示す

```
# mpg %T>%
# {
#   tmp <<- dplyr::select(., )
# } %>%
```

%T>%を使うとコードの途中に、ちょっとだけ枝分かれしたコードを挿入できる。有用な機能ではあるが、トリッキーなコードになる可能性があるため、使いすぎには気をつけたい。

%%

%% は、%>% と.\$ の組み合わせのショートカットである。

```
mpg %>% .$manufacturer %>% head()
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

```
mpg %% manufacturer %>% head()
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

パッケージ開発ではパイプを使った場合の、が推奨されていない。R CMD CHECK(???) の possible problem で Warning が出力され、そのままではCRANでは受け付けてもらえない(たぶん)。automater のように Github でパッケージを公開するならそれでも問題はないが、Check で毎回 Warning が出力されるのは、心理的に嬉しくない。

そこで、DESCRIPTION で次のように%% や%>% をインポートしておくと、パッケージの中でこれらを使える。%>% だけなら、usethis::use_pipe() とすれば、開発パッケージの DESCRIPTION に、importFrom(magrittr, "%>%") を書いてくれる。

```
importFrom(magrittr,"%>%")
importFrom(magrittr,"%$")
```

なお余談ではあるが、この場合は\$の代わりに[[と]]を使っても同じ結果が得られる。[[と]] ではデータフレームの1列をそのまま取り出すので、結果が異なる。

```
mpg %>% .$manufacturer %>% head()
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

```
mpg %>% .[["manufacturer"]] %>% head()
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

```
mpg %>% .[["manufacturer"]] %>% head()
```

```
## # A tibble: 6 x 1
##   manufacturer
##   <chr>
## 1 audi
## 2 audi
## 3 audi
## 4 audi
## 5 audi
## 6 audi
```

`[[]]` と `[]` は、それぞれ `[[` と `[` という関数であるため、以下のように書くことができる。この場合、第1引数がパイプの前から引き継がれるため、`.` を明示する必要がない。

```
mpg %>% .$`(manufacturer) %>% head()
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

```
mpg %>% `[[`("manufacturer") %>% head() # mpg %>% `[[`(. , "manufacturer") と同じ
```

```
## [1] "audi" "audi" "audi" "audi" "audi" "audi"
```

```
mpg %>% `[`("manufacturer") %>% head()
```

```
## # A tibble: 6 x 1
##   manufacturer
##   <chr>
## 1 audi
## 2 audi
## 3 audi
## 4 audi
## 5 audi
## 6 audi
```

stringr で文字列操作

はじめに

stringr は stringi パッケージのラッパー関数群である。stringi は文字列操作の関数群で、文字コードの変換なども含む多様な関数を含んでいる。通常のユーザの文字列操作なら、stringr で大丈夫なことが多い。万が一、込み入った文字列操作が必要なときは、stringi の関数を探してみると良いかもしれない。

stringr には、

stringr と base

base パッケージ

stringr パッケージ

準備

```
install.packages("stringr")
```

```
library(stringr)
```

stringr の関数

stringr の利点

少なくとも自分の経験では、stringr だけで操作が完結することはほとんどない。逆に、パッケージ開発をしていて stringr(や dplyr) を使わずに一日が終わることもあまりない。つまり、stringr はかなり便利で必要不可欠なツールである。もちろん、base パッケージの同様の関数を使っても機能上は問題ないことが多い。でも、引数の指定方法に一貫性があると、コードを綺麗に書くことができる。綺麗なコードは、汚いコードよりも書きやすいし、見た目も良いし、何よりもバグが入りにくい(入らないわけではない)。

lubridate で日付・時刻を扱う

年月日や曜日を扱う場合、パッケージ lubridate を利用するのが便利である。lubridate は、tidyverse に含まれているパッケージの 1 つで、日付や時刻・時間データを扱う際には必須と言っても過言ではない。

1 月後・1 年後の同一日付

例えば、1 月後や 1 年後の同一の日付を得たいとする。これは単純なようで実はややこしい問題を含んでいる。月には大の月・小の月があるし、年には閏年がある。そのため、自分で関数を作成しようとするとなかなか難しい。そこで、lubridate を活用して、簡単に計算する。

1 年後の同一の日付を得るに日「+ years(1)」とすれば良い。単純に 365 日加えるのとは結果が異なる。1 月後の場合には「months(1)」を使う

```
library(lubridate) # tidyverse に含まれており本来不要、説明用に明示
library(tidyverse)
```

```
today() + years(0:4)
```

```
## [1] "2023-05-06" "2024-05-06" "2025-05-06" "2026-05-06" "2027-05-06"
```

```
today() + days(365 * 0:4)
```

```
## [1] "2023-05-06" "2024-05-05" "2025-05-05" "2026-05-05" "2027-05-05"
```

```
today() + months(0:11)
```

```
## [1] "2023-05-06" "2023-06-06" "2023-07-06" "2023-08-06" "2023-09-06"
```

```
## [6] "2023-10-06" "2023-11-06" "2023-12-06" "2024-01-06" "2024-02-06"
```

```
## [11] "2024-03-06" "2024-04-06"
```

```
today() + months(0:11)
```

```
## [1] "2023-05-06" "2023-06-06" "2023-07-06" "2023-08-06" "2023-09-06"
```

```
## [6] "2023-10-06" "2023-11-06" "2023-12-06" "2024-01-06" "2024-02-06"
```

```
## [11] "2024-03-06" "2024-04-06"
```

文字列から Date クラスへの変換

日本語の表記でよく出てくる年・月・日の順の日付表記は、関数 ymd() で Date クラスに変換できる。ymd() は、日付っぽい文字列などを Date クラスにしてくれる。ふつうに使うような以下の文字列は、普通に変換してくれる。ちなみに、日付の後ろに「(月)」のような曜日が入っていても問題ない(曜日は無視される)。

- 2023 年 4 月 10 日

- 2023-4-10
- 2023_4_10
- 20230410
- 2023/4/10

```
c("2023 年 4 月 10 日", "2023-4-10", "2023_4_10", "20230410", "2023/4/10") %>%
  ymd()
```

```
## [1] "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10"
```

```
c("2023 年 4 月 10 日 (月)", "2023-4-10(月)", "2023_4_10(月)", "20230410(月)", "2023/4/10(月)") %>%
  ymd()
```

```
## [1] "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10" "2023-04-10"
```

年が入っていない場合はうまくいかないなので、年を追加する必要がある。

```
c("4 月 10 日", "4/10") %>%
  ymd()
```

```
## Warning: All formats failed to parse. No formats found.
```

```
## [1] NA NA
```

```
c("4 月 10 日", "4/10") %>%
  paste0("2023-", .) %>%
  ymd()
```

```
## [1] "2023-04-10" "2023-04-10"
```

ここでは日付を中心に扱うが、時刻の計算もうまくやってくれる。

```
ymd_hms("2023-5-1-12-23-34") %>%
  print() %>%
  `+`(minutes(40))
```

```
## [1] "2023-05-01 12:23:34 UTC"
```

```
## [1] "2023-05-01 13:03:34 UTC"
```

曜日を求める

日付をもとに `wday()` を用いて曜日を求めることができる。ただし、デフォルトでは日曜日を「1」、月曜日を「2」のように日曜始まりの場合での曜日番号を示す。「`label = TRUE`」とすると、factor としての曜日を返してくれる。

```
x <- today()
wday(x) # week of the day
```

```
## [1] 7
```

```
wday(x, label = TRUE)
```

```
## [1] 土
```

```
## Levels: 日 < 月 < 火 < 水 < 木 < 金 < 土
```

活用例

日付固定 (同じ月日) あるいは位置固定 (n 月の第 n の n 曜日) のときでの一年後の年月日を求めることを考える。日付固定の場合は、既に説明したように非常に簡単に求められる。

```
x <- today()
x + years(1)
```

```
## [1] "2024-05-06"
```

位置固定の場合は、関数を作成する必要がある。年月日から第何の何曜日が分からなければ、位置を固定できない。曜日は `wday()` で求められるため、第何の曜日を求める関数が必要だ。

```
mweek <- function(x){
  (mday(x) - 1) %/% 7 + 1
}
```

`mday()` で月の中で何日目か計算し (つまり `day()` と同じ), そこから 1 日引いた数字を 7 で割る。7 で割ったときに第 1 の曜日は 1 未満, 第 2 の曜日は 1 以上 2 未満であるため, 7 で割ったときの商に 1 を足す。これで第何の曜日がわかる。

```
real <- seq(as.POSIXct("2020-10-1"), as.POSIXct("2020-10-31"), by="day") %>% mweek()
expect <- rep(1:5, each=7)[1:31]
sum(real != expect, na.rm = TRUE)
```

```
## [1] 0
```

```
# testthat::expect_equal(real, expect)
```

念のため, パッケージ `testthat` で確認する。 `testthat::expect_equal()` の結果として, 何も出力されなければテストを通過したことが分かる。

次に, 年月日から 1 年後の年と月を分離してそこから求めたい月の 1 日を `base` の日付とする。

1 日から 7 日まででは第 1, 8 日から 14 日まででは第 2 なので, `base` に「`mweek(x) - 1`」* 7」を足してやる。さらに, これに曜日の補正をするため, `base` と元の日付 (`x`) との曜日の差を追加する。ただし, 差が負の場合は 7 から引いて正にする。なお, 「`for(i in seq_along(diff))`」でループしている部分は, ベクトルへの対応である。入力が 1 日だけの場合は必要ないが, 他の部分がベクトルに対応おり, せっかくなので複数の日付 (Date クラスのベクトル) を受け入れるようにした。

これで, 一応出来上がった。ただし, 第 5 の曜日の場合は, 次の月にずれてしまっている可能性がある。そこで, 月がずれていないか確認して, ずれている場合は「NA」を返す。

```
same_pos_next_yr <- function(x){
  yr <- year(x)
  mn <- month(x)
  base <- ymd(paste0(yr + 1, "-", mn, "-", 1))
  diff <- wday(x) - wday(base)
  for(i in seq_along(diff)){
    if(diff[i] < 0){ diff[i] <- diff[i] + 7 }
  }
  same_pos <- base + (mweek(x) - 1) * 7 + diff
  for(i in seq_along(same_pos)){
    if(month(same_pos[i]) != mn[i]){
      same_pos[i] <- NA
      warning("No same position day with ", x[i], "!")
    }
  }
  return(same_pos)
}
```

実際の日付で確認してみる.

```
days <- today() + (0:30)
days_n <- same_pos_next_yr(days)
```

```
## Warning in same_pos_next_yr(days): No same position day with 2023-05-29!
```

```
## Warning in same_pos_next_yr(days): No same position day with 2023-05-30!
```

```
days
```

```
## [1] "2023-05-06" "2023-05-07" "2023-05-08" "2023-05-09" "2023-05-10"
## [6] "2023-05-11" "2023-05-12" "2023-05-13" "2023-05-14" "2023-05-15"
## [11] "2023-05-16" "2023-05-17" "2023-05-18" "2023-05-19" "2023-05-20"
## [16] "2023-05-21" "2023-05-22" "2023-05-23" "2023-05-24" "2023-05-25"
## [21] "2023-05-26" "2023-05-27" "2023-05-28" "2023-05-29" "2023-05-30"
## [26] "2023-05-31" "2023-06-01" "2023-06-02" "2023-06-03" "2023-06-04"
## [31] "2023-06-05"
```

```
days_n
```

```
## [1] "2024-05-04" "2024-05-05" "2024-05-13" "2024-05-14" "2024-05-08"
## [6] "2024-05-09" "2024-05-10" "2024-05-11" "2024-05-12" "2024-05-20"
## [11] "2024-05-21" "2024-05-15" "2024-05-16" "2024-05-17" "2024-05-18"
## [16] "2024-05-19" "2024-05-27" "2024-05-28" "2024-05-22" "2024-05-23"
## [21] "2024-05-24" "2024-05-25" "2024-05-26" NA NA
## [26] "2024-05-29" "2024-06-06" "2024-06-07" "2024-06-01" "2024-06-02"
## [31] "2024-06-03"
```

```
mweek(days)
```

```
## [1] 1 1 2 2 2 2 2 2 3 3 3 3 3 3 4 4 4 4 4 4 5 5 5 1 1 1 1 1
```

```
mweek(days_n)
```

```
## [1] 1 1 2 2 2 2 2 2 3 3 3 3 3 3 3 4 4 4 4 4 4 4 NA NA
## [26] 5 1 1 1 1 1
```

```
sum(mweek(days) != mweek(days_n), na.rm = TRUE)
```

```
## [1] 0
```

```
# testthat::expect_equal(mweek(days), mweek(days_n))
```

```
wday(days)
```

```
## [1] 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2
```

```
wday(days_n)
```

```
## [1] 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 NA NA
## [26] 4 5 6 7 1 2
```

```
sum(wday(days) != wday(days_n), na.rm = TRUE)
```

```
## [1] 0
```

```
# testthat::expect_equal(wday(days), wday(days_n))
```

計算できているはずだが、日付だけを見てもよくわからない。何回目の何曜日も求めて、確認すると最後の方でエラーが出ている。第5週でのずれる部分である。ただし、閏年以外の2月だけは4週にピッタリ収まるので、エラーが出ないはずだ。

テストもだいたいあっていそうだが，分かりにくいため，カレンダーを表示してみよう．

```
library(calendR)
```

```
calendR::calendR(year(x)      , month(x))
```

5... 2023

.....
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

```
calendR::calendR(year(x) + 1, month(x))
```

5... 2024

				1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11	
12	13	14	15	16	17	18	
19	20	21	22	23	24	25	
26	27	28	29	30	31		

ggplot2 で楽に綺麗に作図

R の作図環境の概要

R の作図環境として主なものは以下の 4 つがある。

- base graphics
- lattice
- grid
- ggplot2

base graphics は古典的な作図環境で長らく使われてきた。R が統計解析のシステムとして使われるようになった理由の 1 つとして強力な作図環境があり、まさしくこの graphics システムがそれに当たる。すごく便利なものと当時は考えていた。ただし、base graphics は紙と鉛筆を使って作図していくようなものだと喩えられることがあるように、作図済みのものは修正できない。また、作図する関数によって引数の取り方が異なるなど、発展するなかで継ぎ接ぎだらけになってしまった。システムが急速に発展する中では、このような状況はよくあることで途中から綺麗に整理し直すことは困難である。新しいシステムを作り直す方が楽であり現実的である。

そのような状況もあつてか、lattice、それをもとにした grid、さらにはこの 2 つをベースにした ggplot2 が開発された。これら 3 つの作図環境のうち、最近では ggplot2 が最も使われているものである。ggplot2 では、Grammar of Graphics、つまり作図の文法という考え方が用いられており、洗練された作図が可能である。詳細は「ggplot2」(Hadley) を参照して欲しい。

ggplot2 とは

ggplot2 は、作図環境を提供するパッケージである。base の作図環境とは異なり、統一的なインターフェースを持っており、非常に使いやすい。散布図を作成したデータをもとにして、簡単に箱ひげ図などの他の形式の作図やグループ分けした作図も簡単である。

ggplot2 の利点

ggplot2 では、第 1 引数として tidy なデータフレームを受け取る。

- 1 つのデータから各種作図が可能
 ちょっとした変更で棒グラフ、散布図、などなど各種の plot が可能
- 図が綺麗
- テーマの変更も簡単
- facet によるグループ分けも便利
- magrittr によるパイプとの相性が良い
 特にファイル名を設定するときの`%%`や`%T%`など
- ggplot2 をサポートするパッケージも豊富
 凡例の自動的な位置決めや配置など ggpubr など

ggplot2 の基本

iris を例にするが、できれば、vegan とか dave のデータを使う tidy data への変換が必要コードのみか、詳しくは松村や比嘉の解説を参考に

gather() と spread() は pivot_longer() と pivot_wider() になって使いやすくなった。Hadley 自身も使い方を混乱していたらしい

aesthetics

geom_point() geom_bar() aes() colour group size

facet を使おう

for ループや subset, あるいは dplyr::filter を使っていたものが、一気にできて便利コードも簡単で見やすいコードの転用が簡単

group VS facet

ggsave

- png と PDF
 PDF で日本語文字が化ける場合は、png を使う
- 指定しないと、直前のプロット

文字化けへの対処 (windows)

-cario?

theme を少しだけ説明

- デフォルト
- theme_bw()

shiny

shiny は必要? R だけでウェブアプリが作れる reactive の考え方を覚える必要あり

作図の自動化

例を示す.

- 入力: readr, readxl
エクセルか csv でデータ入力
- 分析: dplyr, stringr
filter(), summarise(), tally()
- 作図: ggplot2
ggplot() geom_point() geom_jitter() geom_boxplot() ggsave()

参考書

- ggplot2
- ggplot2 のレシピ
- unwin GDA
- チートシート

fs でファイル操作

はじめに

Windows ならコマンドプロンプト (古い言い方なら, いわゆる dos 窓), Mac なら Terminal, Linux ならシェルを使えば, 各種ファイル操作をコマンドラインで実行できる. もちろん, マウスを使った操作でも構わないが, 多くのファイルでの名前の変更やファイル名によるフォルダの振り分けなら, マウス操作よりもコマンドを使った操作が早いし確実である. なお, Windows の場合は [Win] + [R] で「ファイル名を指定して実行」で「cmd」と入力すれば,

コマンドプロンプトやバッチファイル (あるいはシェルスクリプト) などでの操作に慣れていれば, それが便利である. ただ, dos コマンドの変数の扱いは, 慣れていないと結構難しい (慣れていても?). そんなときは, R の関数 (shell(), system()) を使って, dos コマンドを駆使して, ファイル名を取得・名前の変更をすることができる. 既に dos コマンドを書いているならば, shell() などを使うのは良い方法である.

また, R の base パッケージにはファイル操作のための関数が多くある. 例えば, list.files() でファイル名一覧を取得でき, file.rename() でファイル名の変更ができる. しかし, base の関数群の中には名前が分かりにくい点や引数の一貫性が無い点などの難点がある. これは, R が発展していく中で徐々に関数が追加されたことによるようだ.

fs パッケージでは, base の関数群を整理するとともに, 新たな有用な関数が追加されている. そのため, 命名規則が一貫しており, ベクトル化した引数を受け付けるため, 非常に使いやすい.

複数の OS を使う場合は, コマンドが異なるためそれぞれでコマンドを覚えなければならない. いちいち個別のものを覚えるよりも, fs パッケージの関数を覚えておけば, どの OS であろうが同じように動作してくれて楽ができる.

なお, fs, base, shell の詳細な比較が, 以下の URL にあるので, 参照してほしい.
<https://cran.r-project.org/web/packages/fs/vignettes/function-comparisons.html>

shell, base パッケージ, fs パッケージ

a.pdf, b.pdf, ..., j.pdf を 01.pdf, 02.pdf, ..., 10.pdf のように 10 個のファイル名を変更したいとする.

shell を使う

shell なら, 以下のようなコマンドだ. dos コマンドの変数やループなどを駆使すると, もっと短く書けるのかもしれないが, 残念ながらそのような知識がない. テキストファイルで書いてもそれほど時間がからないだろうが, ファイル数が多くなれば大変だ.

```
rename a.pdf 01.pdf
rename b.pdf 02.pdf
rename c.pdf 03.pdf
...
rename j.pdf 10.pdf
```

base パッケージ

基本的に tidyverse の関数群を使わず、できるだけ R の標準の関数を使った例を示す。sprintf() は使い慣れていないと、どのように指定すべきか分かりにくい。

```
old <- paste0(letters[1:10], ".pdf")
new <- paste0(sprintf("%02.f", 1:10), ".pdf")
file.rename(old, new)
```

fs パッケージ

fs パッケージとともに、stringr を使った例を示す。ファイル操作をする際には、文字列の置換・検索などを行うことが多いので、stringr が役立つ。stringr パッケージの関数は、str_ の名前になっているため、覚えやすい。fs パッケージの関数は、パス操作は path_、ディレクトリ操作は dir_、ファイル操作は file_ という名前がついている。

```
library(stringr)
old <- str_c(letters[1:10], ".pdf")
new <- str_c(str_pad(1:10, width = 2, side = "left", pad = "0"), ".pdf")
file_move(old, new)
```

準備

```
install.packages("fs")
```

```
library(fs)
```

fs の関数群

パス操作 (path_), ディレクトリ操作 (dir_), ファイル操作 (file_*) の関数群に分けることができる。パス操作には、base や shell にはない機能が多くあって、使いやすい。拡張子を取り除く関数を自作したことがあるが、同じような関数 (しかもおそらく、fs のほうがしっかりしている) があることを見つけたときには、下位機能の車輪を再発明してしまったと後悔した。

fs, base, shell の比較は次の URL を参照して欲しい。

<https://cran.r-project.org/web/packages/fs/vignettes/function-comparisons.html>

パス操作

パス操作では、stringr を駆使して自作しないといけなような関数が多くある。特に、パスからディレクトリ名、ファイル名、拡張子を抽出してくれる関数は便利だ。自作してもそれほど難しくはないが、(少なくとも自分の) 自作した関数にはバグが入っている可能性がある。予想外のパスを指定した場合には、予想外の結果になることがあるだろう。そのような不具合を防ぐためにも、fs パッケージのパス関数を使うほうが良さそうである。

```
path("top_dir", "nested_dir", "file", ext = "ext") # パス作成
path_temp(), path_temp("path") # 一時パス名の作成
path_expand("~/path") # "~" をユーザのホームディレクトリに変換したパス
path_dir("path") # パスからディレクトリ名抽出
```

```

path_file("path") # パスからファイル名抽出
path_ext("path") # パスから拡張子抽出
path_ext_remove("path") # パスから拡張子を削除
path_home() # ホームディレクトリ
path_package("pkgname", "dir", "file") # パッケージのパス名
path_norm("path") # 参照や"."の削除
path_real("path") # 実体パス (シンボリックリンクを実体パスに)
path_abs("path") # 絶対パス
path_rel("path/foo", "path/bar") # 相対パス
path_common(c("path/foo", "path/bar", "path/baz")) # パスの共通部分
path_ext_set("path", "new_ext") # 拡張子変更
path_sanitize("path") # 無効な文字を削除
path_join("path") # 結合
path_split("path") # 分割

```

ディレクトリ操作

shell や base でも同様の機能があるが、複数処理の `dir_map()` やツリー表示の `dir_tree()` は単純に嬉しい。

```

dir_ls("path") # 一覧
dir_info("path") # 情報
dir_copy("path", "new-path") # 複写
dir_create("path") # 作成
dir_delete("path") # 削除
dir_exists("path") # 有無確認
dir_move() (see file_move) # 移動
dir_map("path", fun) # 複数処理
dir_tree("path") # ツリー表示

```

ファイル操作

ファイル操作は shell や base とそれほど変わらない感じがする。

```

file_chmod("path", "mode") # 権限変更
file_chown("path", "user_id", "group_id") # 所有者変更
file_copy("path", "new-path") # 複写
file_create("new-path") # 作成
file_delete("path") # 削除
file_exists("path") # 有無確認
file_info("path") # 情報
file_move("path", "new-path") # 移動
file_show("path") # 開く
file_touch() # アクセス時間等の変更
file_temp() # 一時ファイル名の作成

```

fs を使ったファイル操作例

ごく個人的なことだが、R のバージョンアップ時には Rconsole と RProfile.site を古いバージョンから複製して、カスタマイズした設定を引き継いでいる。バージョンアップをそれほど頻繁にしないのであれば、手作業でコピーしてもそれほど問題はない。普通の R ユーザなら常に最新版を使わなくても良い。ただ、R パッケージの開発をしていると、開発中のパッケージが依存しているパッケージが最新版の R で開発されている旨の警告がでることが結構ある。ごく最近までは、手作業でファイルをコピーしていたが、よく考えたらこういった作業は自動化するべきだと気づいた。そこで、fs パッケージを使ってファイルをコピーするスクリプトを作成した。

```

# Script to copy Rconsole for updating R
# RをバージョンアップしたときのRconsoleの複製スクリプト
# https://gist.github.com/matutosi/6dab3918402662f081be5c17cc7f9ce2
library(fs)
library(magrittr)
wd <-
  path_package("base") %>%
  path_split() %>%
  unlist() %>%
  .[-c((length(.) - 2):length(.))] %>%
  path_join()
setwd(wd)
dir <- dir_ls()
d_old <- dir[length(dir)-1]
d_new <- dir[length(dir)]
files <- c("Rconsole", "Rprofile.site")
f_old <- path(d_old, "etc", files)
f_new <- path(d_new, "etc")
file_copy(f_old, f_new, overwrite = TRUE)

```

このように、定期的あるいはバージョンアップなどに伴うファイルのコピーや移動はそれなりにあるように思う。そのような場合は、fsを活用して作業を自動化するとよいだろう。なお、fsで対応していない部分の文字列操作には、stringrを使うと便利である。

おまけ：GUIでの作業フォルダの指定

GUI(Graphical User Interface) による作業フォルダを指定するには、tcltk パッケージを使うと良い。なお、tkchooseDirectory() で得たオブジェクトをそのまま setwd() で指定するとエラーになるので、fs::path() でパスに変換しておく。

```

getwd()
install.packages("tcltk")
library(tcltk)
wd <- tcltk::tkchooseDirectory()
setwd(fs::path(wd))
getwd()

```

shell

- Rからシェルのコマンドを使う
 - ファイルの移動
 - PDF ファイルの結合
 - png から PDF へ変換

手作業でも良いが、ファイル数が多かったり、作業回数が多かったりするなら、自動化するのが便利である。例えば、ファイルの操作やちょっとしたCUIアプリをコマンドでの動作をRでやってしまおうという邪道中の邪道である。上記の操作をする際は、LinuxやMacであればshellスクリプトとして、Windowsであればバッチファイルとしてコードを書くのが本来の方法である。しかし、shellスクリプトやバッチファイルのコマンドを体系的に勉強したことはない(その意味ではRの勉強もかなり怪しい)。ウェブの情報をもとにしつつ、なんとなくコードを書いたことはある。とはいえ変数の使い方などは特によくわからないので、ちょっとした操作にも時間がかかりそう。そこで、慣れたRを使って雑多な操作をやっつけてしまおうと考えた。

以下のような操作を自動化する．・複数のフォルダに入った PDF ファイルを 1 つの PDF に結合・結合後のファイルを指定場所に移動・元ファイルを削除

なお、以下は基本的に windows での操作を前提としているが、Linux や Mac でも同じあるいは類似のコマンドで代用できる可能性が高い．日本語文字が入っていると、操作に若干手間がかかることが多い．

dos コマンド ls, dir ファイル、ディレクトリの一覧を取得 move, copy, remove, rename ファイルの移動、コピー、削除、リネーム cd ディレクトリの移動

R の関数 shell(), system() コマンドの実行 setwd() ワーキングディレクトリの設定ディレクトリ名にスペースや日本語が入っていて、cd コマンドがうまくいかないときは、こっちのほうが便利 paste0() 文字列の結合 stringr の関数 stringi の関数多くの関数は stringr にラッパーがあるが、文字コードの変換などは stringi の関数が必要日本語文字を使わなければ不要ファイル名の命名規則を決めておき、お世話にならない方が幸せ purrr::map() for loop の代わり # ファイル名を取得する関数など

その他ツール concatPDF PDF の結合など (win10 OK, win11 NG) # ConcatPDF /outfile Merged.pdf File1.pdf File2.pdf File3.pdf

pdftk PDF の結合など (win11 OK) pdftk File1.pdf File2.pdf File3.pdf cat output Merged.pdf

ImageMagick 画像変換など

準備

Python のスクリプト実行

```
wd <- "D:/matu/work/tmp"
setwd(wd)
system("c:/windows/py.exe pdf.py", intern = TRUE)
shell("pdf.py")
```

rvest でスクレイピング

スクレイピング

ここでのスクレイピングとは、ウェブスクレイピングの省略のことで、ウェブサイトにある情報を収集することである．ウェブサイトから植生調査データを収集することはほとんどないものの、関連データの収集は可能である．例えば、気象庁のページから気象データが収集可能である．もちろん、気象データは手動でも収集可能ではあるが、多大な手間と長い時間が必要である．研究に必要なデータを自動で取得できれば、手間と時間の節約が可能である．

そこで、本稿ではウェブでの情報収集の方法を紹介することを目的とする．世界の各地点の気象データをプロット情報収集には R のパッケージである rvest を用いる．rvest を用いて気象庁のページから世界の気象データを入手して、気候ダイアグラムを描画する．

R のパッケージ作成では、rvest を用いて作成した関数と収集したデータをまとめたパッケージの作成方法を紹介する．著者自身、他人のためにパッケージをつくることは考えておらず、基本的には自分の研究や作業のための関数をまとめることを目的としてパッケージをいくつか作成した．作成したら、ついでに他人にも使ってもらえれば嬉しいという程度である．

過去に作成した関数は、しばらくすると関数の引数や返り値がどのようなものであったのか忘れてしまいがちである．パッケージをつくる (特に CRAN に登録する) には、引数、返り値、使用例などをまとめる必要がある．きっちりまとめなくても良いのではあるが、決まった形式の方がむしろまとめやすい．また、RStudio と usethis, testthat, devtools などのパッケージを使ってパッケージ開発すると、各種チェックやテストが可能である．各種チェックやテストでたくさんエラーを見ると、チェックやテストは正直なところ煩わしいと感じる．特に、パッケージ開発に慣れていないと特にそうである．しかし、チェックやテストをすることで、関数の完成度を確実に高めることができるため、パッケージとしてまとめる利点である．

rvest と RSelenium

スクレイピングをするために使われる主な R のパッケージとしては、rvest と RSelenium がある。rvest は、静的なサイトを対象とするときに役立つ。つまり、URL を指定すれば対象のサイトのページが決まるときである。気象庁での気象データを提供しているページがこれに当たる。一方、RSelenium は動的なサイトを対象とするときに役立つ。例えば、テキストボックスへのデータ入力やプルダウンメニューの選択あるいはその後のマウス操作でページが遷移する場合である。このような動的なサイトでは、Selenium だけでなく、Javascript を部分的に用いるのも効果的である。なお、rvest でもユーザ名とパスワードを用いた一般的なログインは可能である。また、polite パッケージと組み合わせることである程度の動的なサイトのスクレイピングは可能である。

rvest のできること

- HTML の取得
- DOM の取得: id, class, tagName などを用いる
- table の取得
 - HTML 内の取得したいデータは table にあることが多いため、非常に便利そもそも、table でないデータを取得するのは非常に不便
- リンクの取得
ページ遷移に使用する
 - stringr と組み合わせて使うと良い
 - 文字コードの変換には stringi を用いる
 - tidyverse や magrittr との合せ技が便利
- Form の入力・選択
 - radio ボタンはちょっと工夫が必要
-`moranajp::html_radio_set()`
無理やりな感じではあるが、同一名称の radio ボタンを全て同じ値に変更する
本来なら、不要な radio ボタンのフォームを削除
可能だが、インデックスがずれるので結構厄介
- polite パッケージとの連携
使えば便利だが、ここでは説明せず

準備

例によって rvest をインストールする。curl と polite パッケージは少しだけ使うので予めインストールしておく。tidyverse は既にインストールしているはずだが、まだの場合はインストールする。

```
install.packages("rvest")
install.packages("curl")
install.packages("polite")
# install.packages("moranajp")
# install.packages("tidyverse") # 未インストールの場合
```

```
library(rvest)
library(tidyverse)
```

HTML の取得

スクレイピングによってデータを取得するには、取得したいページの URL を特定しなければならない。静的なページあるいは固定された URL であれば、ブラウザのアドレスバーにある URL をそのまま使えば良い。動的あるいは特定の規則に従った URL であれば、取得したいページの URL の規則性を知らなければならない。

ここでは、「日本のレッドデータ検索システム」から都道府県の RDB 指定状況とその地図情報の画像を入手することを考える。

<http://jpnrdp.com/search.php?mode=spec>

まずはブラウザでページにアクセス、手作業で検索、指定状況とその地図情報の画像を入手してみる。上記 URL で例として示されているニッコウキスゲをキーワード (種名) として入力すると、ページ遷移する。アドレスバーにはカタカナがそのまま表示されている。しかし、アドレスをコピーしてテキストエディタに貼り付けると文字化けしたようになる。これは URL エンコードによってコード変換された結果であるが安心して欲しい。rvest を使って HTML を取得するときには、日本語をそのまま使用することができる。上記の URL のうち「`http://jpnrd.db.com/search.php?mode=`」まではここで使用するページに共通する部分であるため、main としておく。検索したい種名は変更する部分で、とりあえず `sp` に入れておく。キーワード検索の命令 (php によるクエリ) と種名の文字列を結合し、さらに main と結合する。これで得た URL を `read_html()` に与えると、ページの HTML を得ることができる。

```
main <- "http://jpnrdp.com/search.php?mode="
sp <- " ニッコウキスゲ"
find_sp <- paste0("key&q=", sp)
html <-
  paste0(main, find_sp) %>%
  rvest::read_html()
html

## {html_document}
## <html>
## [1] <body>\n<em></em>\n\n<title>日本のレッドデータ検索システム</title>\n<meta http-equiv="co ...
```

必要な情報の取得

取得した HTML には必要な情報が含まれているが、そのままの状態では使い物にならない。また、文字列に変換して stringer を駆使すれば、情報を得ることはできるだろうが、多大な苦勞が待っている。

```
as.character(html)

## [1] "<!DOCTYPE html PUBLIC "-//W3C//DTD HTML 4.0 Transitional//EN" "http://www.w3.org/TR/REC-html"
```

```

rvest::html_table(html) %>%
  purrr::map(colnames) # とりあえず, colnames だけ表示

## [[1]]
## [1] "X1"
##
## [[2]]

```



```
dplyr::select(no = 1, wamei = 4) %>%
tidyr::separate(wamei, into = "wamei", sep = stringi::stri_unescape_unicode("\\u00a0"), extra = "drop")
dplyr::filter(stringr::str_detect(wamei, paste0("^", sp, "$"))) %>%
`[[`("no")
```

URL の生成・データの取得

目録 No が取得できれば、完成したようなものである。ブラウザで表示した地図や指定状況の URL を生成する。“map&q=0605009”の詳細な意味はよくわからないが，“0605009”あたりは分類群を指定しているのだと考えられる。これに維管束植物(コケなどを除くシダ植物と花の咲く植物)の中での目録 No を結合して、さらに main を結合すると URL の出来上がりだ。

```
show_sp <- paste0("map&q=0605009", no)
paste0(main, show_sp)
```

```
## [1] "http://jpnrdb.com/search.php?mode=map&q=06050095259"
```

```
html <-
  paste0(main, show_sp) %>%
  rvest::read_html()
```

生成した URL をブラウザで表示させると地図ページが表示される。一覧表の表示にしても URL は変更されないため、内部的に表示を変更させている可能性が高い。そこで、とりあえず HTML から table データを取得してみる。

```
html %>%
  rvest::html_table()
```

```
## [[1]]
## # A tibble: 1 x 1
##   X1
##   <lgl>
## 1 NA
##
## [[2]]
## # A tibble: 1 x 1
##   X1
##   <chr>
## 1 "ホーム | \r\n >>"
##
## [[3]]
## # A tibble: 1 x 6
##   X1     X2     X3     X4     X5     X6
##   <lgl> <lgl> <lgl> <lgl> <lgl> <lgl>
## 1 NA    NA    NA    NA    NA    NA
##
## [[4]]
## # A tibble: 49 x 5
##   `都道府県名` `和名` 学名 RDBカテゴリ名 統一カテゴリ
##   <chr>        <chr> <chr> <chr>        <chr>
## 1 環境省RDB    -      -      -            ""
## 2 北海道      -      -      -            ""
## 3 青森県      -      -      -            ""
## 4 岩手県      -      -      -            ""
## 5 宮城県      -      -      -            ""
## 6 秋田県      -      -      -            ""
```

```
## 7 山形県 - - - ""
## 8 福島県 - - - ""
## 9 茨城県 - - - ""
## 10 栃木県 - - - ""
## # i 39 more rows
##
## [[5]]
## # A tibble: 8 x 13
##   ニッコウキスゲ学名: Hemerocallis dumo~1 ニッコウキスゲ ニッコウキスゲ `学名: `
##   <chr> <chr> <lg1> <lg1>
## 1 "ニッコウキスゲ" "ニッコウキス~ NA NA
## 2 "学名: " "Hemerocallis~ NA NA
## 3 "分類: " "単子葉類 \t~ NA NA
## 4 "登録別名: " "" NA NA
## 5 "環境省カテゴリ: " "なし" NA NA
## 6 "都道府県のRDB指定状況: " "" NA NA
## 7 "" "" NA NA
## 8 "*埼玉県・東京都・神奈川県では、季節~ "" NA NA
## # i abbreviated name:
## # 1: `ニッコウキスゲ学名: Hemerocallis dumortieri var. esculenta分類: \r\n\t\t\r\n\t\t 単子葉類 \t
## # i 9 more variables: `Hemerocallis dumortieri var. esculenta` <lg1>,
## # `分類: ` <lg1>,
## # `単子葉類 \t\t\t\t \t\t\r\n\t\t\t\t\t\t \r\n\t\t\t\t\t\t\r\n\t\t\t\t\t\t ユリ科` <lg1>,
## # `登録別名: ` <lg1>, `` <lg1>, `環境省カテゴリ: ` <lg1>, なし <lg1>,
## # `都道府県のRDB指定状況: ` <lg1>, `` <lg1>
##
## [[6]]
## # A tibble: 6 x 2
##   X1 X2
##   <chr> <chr>
## 1 ニッコウキスゲ "ニッコウキスゲ"
## 2 学名: "Hemerocallis dumortieri var. esculenta"
## 3 分類: "単子葉類 \t\t\t\t\t \t\t\r\n\t\t\t\t\t\t \r\n\t\t\t\t\t\t~
## 4 登録別名: ""
## 5 環境省カテゴリ: "なし"
## 6 都道府県のRDB指定状況: ""
```

果たして、table の 4 番目に欲しいデータがあった。あとは、filter を使って指定されていない都道府県データを除去する。さらに必要に応じて、入手したデータを整形・変換・保存して欲しい。

```
html %>%
  rvest::html_table() %>%
  `[[`(4) %>%
  dplyr::filter(和名 != "-")
```

```
## # A tibble: 4 x 5
##   `都道府県名` 和名 学名 RDBカテゴリ名 統一カテゴリ
##   <chr> <chr> <chr> <chr> <chr>
## 1 "埼玉県\r\n      *" "ニッ~ "Heme~ "絶滅危惧 類~ ""
## 2 "滋賀県" "ニッ~ "Heme~ "分布上重要~ ""
## 3 "島根県" "ニッ~ "Heme~ "絶滅危惧 類~ ""
## 4 "*埼玉県・東京都・神奈川県では、季節~ "*埼玉~ "*埼玉~ "*埼玉県・~
```

地図画像の取得

指定状況の地図画像を取得するには、まずブラウザで画像の URL を得る必要がある。GoogleChrome で画像を右クリックして、「画像アドレスをコピー」を選択する。ニコウキスゲの場合は、以下の URL を得ることができる。

<http://jpnrdb.com/png/06/06050095259.png>

指定状況の一覧表データの HTML にも (ほぼ) 同じものが含まれているはずである。rvest で目的とするファイルの URL を得るコードは以下のとおりである。

```
html %>%
  rvest::html_elements("img") %>%
  rvest::html_attr("src") %>%
  `[`(., stringr::str_detect(. , as.character(no)))
```

```
## [1] "./png/06/06050095259.png"
```

上のコード使用したように、rvest で便利な関数として `html_elements()` と `html_attr()` がある。それぞれ次のように id, class, tag, 属性によって HTML から DOM を取得可能である。

- `html_elements()`
 - `html_elements("#id")`
 - `html_elements(".class")`
 - `html_elements("tag")`
- `html_attr("attribute")`

DOM とはドキュメントオブジェクトモデルのことで、HTML の各要素をオブジェクトとするモデルのことである。id, class, tag, 属性を指定することで、効率的にオブジェクトを取り出すことができ、便利である。

id, class, tag, 属性についての詳細は、HTML の解説などを別途参照していただきたい。簡単に説明をすると、id は HTML 内で一意に決定できるもので、日本のレッドデータ検索システムでは `<id = "header">` などが使われている。class は、HTML 内で複数出てくることがあり、`<class = "kind_list">` のように指定される。tag は、上記のやを含めたすべてのタグのことで、他にも

,
,

など多くの物がある。`html_table()` は `html_elements("table")` と同等であるが、table タグは入手したいデータを含むことが多いため個別の関数が作成されたのだろう。属性は tag の、「`href = "index.html"`」の部分で、`html_attr("href")` とすると、「index.html」を取り出すことができる。href が複数ある場合は、すべてを含むベクトルが返り値になる。

ただし実際には、上のようにブラウザでの右クリックか、以下の手順で実行するのが手っ取り早い。 - ブラウザで地図ページを表示させる

- F12 を押して開発者ツールを開く
- 左上の と の結合したアイコンをクリック後に画像をクリック
- Elements のところに出てきた URL が求める URL
- タグを右クリックして [Copy] - [Copy element] や [Copy outerHTML] で内容をコピーできる

画像の URL がわかれば、ファイルをダウンロードして保存するだけだ。これは、curl パッケージの `curl_download()` で簡単にできる。引数として url には URL を、destfile にはダウンロード後のファイル名を指定する。ファイル名自体は指定が必要である。パスを指定しないと作業ディレクトリ (`getwd()` で取得可能) に保存されるが、作業ディレクトリ以外に保存したい場合は、相対パスや絶対パスを指定する。

```
# wd <- "set_your_directory"
# setwd(wd)
url_img <- "http://jpnrdp.com/png/06/06050095259.png"
curl::curl_download(url = url_img, destfile = paste0(sp, ".png"))
```

このようにしてスクレイピングが可能ではあるが、URL の生成規則は、変更されることがある。`read_html()` で HTML が取得できない場合は、URL が正しいか確認する必要がある。また、動的なサイトでは、id が固定ではない可能性がある。サイトの仕様変更によって、タグ、クラス、その他の構造が変更されることがある点も注意しなければならない。

綺麗な構造のサイトであっても、手作業が混入していることはある。例えば、括弧が正しく対応しているはずだと思っていても、開く側が”『“で閉じる側が”』“になっていることがあった。その場合に正規表現”『.+』“ではうまく鉤括弧内の文字列を取得できないことになる。

複数種への対応

前節のようにすれば、レッドデータへの指定状況とその地図データを得ることができる。1 種だけのデータ・画像の入手方法を紹介したが、複数種についてもこれを応用すれば可能である。その際には、`for` ループか、`purrr::map` を使うと良いだろう。

複数ページのデータを取得する場合は一般的には 5 秒程度の間隔を置く必要がある。ただし、サイトによってはそれ以上の間隔を求めているときがある。その内容はドメインのトップに置かれた「robots.txt」で確認できる。「`http://jpnrdp.com/ robots.txt polite %60bow()`」でスクレイピングについて調べてみる。

```
polite::bow("http://jpnrdp.com/")

## <polite session> http://jpnrdp.com/
## User-agent: polite R package
## robots.txt: 1 rules are defined for 1 bots
## Crawl delay: 5 sec
## The path is scrapable for this user-agent
```

「Crawl delay: 5 sec」とあるため、5 秒間隔でスクレイピング可能であると思われる。これ未満の間隔でデータを頻繁に求めると、「攻撃」と見なされて接続できな状態になる可能性がある。さらに悪質なときには法的手段を取られることもありえるので、注意が必要である。ただし、`http://jpnrdp.com/ robots.txt polite`。大量にデータを入手する必要がある場合は、あらかじめ管理者に連絡する方が無難である。

おまけ：webshot でウェブページを画像に変換

`rvest` でスクレイピングしたウェブページを画像として残しておきたいことがある。つまり、ウェブのスクリーンショットを保存したい場合だ。まさにこの文章を書いているときがそうだが、データを入手してそのサイトについて他人に説明したいときがあるだろう。そのようなときはパッケージ `webshot` が便利だ。

例によってまずはパッケージをインストールする。

```
install.packages("webshot")
```

`webshot` は内部で `Phantomjs` というブラウザを使っているため、`webshot` から `Phantomjs` をインストールするための関数を実行する。なお、`Phantomjs` はヘッドレスブラウザの 1 つである。ヘッドレスブラウザは、画面を描画しないブラウザのことである。つまり、画面上で HTML を表示させずにデータのやり取りだけをするもので、プログラムやスクレイピングでは重宝する。

```
webshot::install_phantomjs()
```

イントールに若干時間がかかるが、終わればあとは簡単だ。関数 `webshot` に URL と保存するファイル名を指定すれば、画像を作業フォルダに保存してくれる。


```
webshot::webshot("http://jpnrd.db.com/search.php?mode=spec", "rvest_1.png")
webshot::webshot("http://jpnrd.db.com/search.php?mode=key&q= ニッコウキスゲ", "rvest_2.png")
webshot::webshot("http://jpnrd.db.com/search.php?mode=map&q=06050095259", "rvest_3.png")
```

なお、パッケージ magick を使うと保存した画像に対してトリミングなどの加工ができる。magick で画像編集

Rselenium

Selenium は、ブラウザを使って動的に巡回しつつ、スクレイピングをするのに適している。

Javascript や PHP などを使って、動的に作成されるサイトでは、URL だけではページを特定することはできない。そのため、rvest だけではデータを取得するのが困難である。

準備

- RSelenium: CRAN からインストール
- Selenium: 本家サイトからインストール
 - 注意: ver3.xxx をインストールする
ver4.0 以上は RSeleniumu が対応していない (Python なら可)
- ChromeDriver
 - 注意: 自身の利用しているブラウザのドライバが必要 (バージョンも合致する必要あり)
GoogleChrome は自動的に update されるので、バージョンをよく確認する通常は、安定版の最新版で大丈夫である
 - Selenium と同じフォルダに保存する

ブラウザの自動化

使い方

注意点

要素の取得

id がわかるとき document.getElementById()

xpath document.selectQueryAll() [] 動的にサイトが作られているときには、変化する可能性があるので注意

使用されている JavaScript の関数がわかる script <- “” rem\$execute(script)

例 BiSS の文字サイズの変更主命リストの列数の変更

スクレイピングの実行時には、適切な時間間隔を空ける - 通常は 5 秒以上を求めていることが多い

ページ遷移の命令を送信後、十分な間隔がないと HTML の要素を取得しきれないことがある極端な場合、サーバーからの情報がほとんど何も送られていない、つまりページの内容がほとんど何もないことにある。この状況は、通常のマウス操作では何も表示されていないところをクリックするのと同じ状態である。サーバからの情報を待つ意味でも適度な間隔を空けるのが望ましい

動的なサイトの場合は、HTML の構成中の可能性もあるログイン等のページでも、遷移途中のことがある。

その他

- R からシェルのコマンドを使う

- png から PDF へ変換
- ファイルの移動
- Seleniumu の起動・終了
- MeCab や GINZA の実行

magick で画像編集

パッケージ magick を使うと、各種の画像編集ができる。magick は、画像編集ソフトである ImageMagick を使うためのパッケージである。ImageMagick は、png, gif, pdf などをはじめ多くの画像形式を扱うことができ、拡大・縮小、形式変換、回転、切り出し、色加工など多くの機能を備えている。ImageMagick 自体は、コマンドラインで使うことができるので、関数 `system()` を使って R から操作することもできる。でも、車輪の再発明は時間と労力の無駄なので、パッケージ magick を紹介する。

準備

例によってまずはパッケージをインストールする。svg 形式の画像を読み込む場合は、rsvg パッケージもインストールしておく。ウェブのスクリーンショットを使うので、webshot も必要だ。

```
install.packages("magick")
install.packages("rsvg")
install.packages("webshot")
```

```
library(magick)
library(tidyverse)
library(webshot)
```

使い方

ImageMagick 自体に多くの機能があり、magick でもその機能を利用できるため、1つ1つを紹介するとキリがない。ここでは、基本的な機能として画像の読み込み・変換・保存を紹介するとともに、rvest でスクレイピングで使った画像を作成するために、実際に操作したコードを説明する。

読み込み・表示・変換・保存

png, jpeg, gif 形式の画像には `image_read()`、svg 形式には `image_read_svg()`、PDF 形式には `image_read_pdf()` をそれぞれ用いる。読み込んだ画像オブジェクトの情報を表示するには、`image_info()` を使う。表示だけなら、オブジェクトをそのまま入力しても同じである。

```
frink <- magick::image_read("https://jeroen.github.io/images/frink.png")
tiger <- magick::image_read_svg("http://jeroen.github.io/images/tiger.svg")
image_info(frink)
```

```
## # A tibble: 1 x 7
##   format width height colorspace matte filesize density
##   <chr>   <int> <int> <chr>      <lgl>    <int> <chr>
## 1 PNG      220   445 sRGB        TRUE     73494 72x72
image_info(tiger)
```

```
## # A tibble: 1 x 7
##   format width height colorspace matte filesize density
##   <chr>   <int> <int> <chr>      <lgl>    <int> <chr>
## 1 PNG      900   900 sRGB        TRUE         0 72x72
```

画像そのものを表示するには、`image_browse()` を用いる。OS で関連付けられているソフトが立ち上がって、画像を閲覧できる。

```
magick::image_browse(tiger)
```

`image_convert()` を用いると画像を png, jpeg, gif, pdf 形式に変換できる。画像形式は、`format` で指定する。また、`type = "grayscale"` とすると、白黒画像似できる。

```
magick::image_convert(tiger, format = "pdf") %>%
  magick::image_browse()
```

画像を保存するには、関数 `image_write()` を使う。この関数の引数にも `format` があり、ここで形式を変換することもできる。`image_write()` の `path` で拡張子を含むファイル名を指定しても、自動的にはその拡張子の形式としては保存されない。形式を変換したい場合は、`format` で形式を指定しなければならぬ。`format` を指定しなければ、もとの画像の形式のまま保存される。

```
magick::image_write(frink, path = "frink.pdf", format = "pdf")
magick::image_write(frink, path = "frink")
```

切り抜き

画像を切り抜きする前に、`webshot` を使って画像を取得する。

```
# 画像の取得
urls <-
  list("http://jpnrdp.com/search.php?mode=spec",
        "http://jpnrdp.com/search.php?mode=key&q= ニッコウキスゲ",
        "http://jpnrdp.com/search.php?mode=map&q=06050095259")
pngs <- paste0("rvest_", 1:3, ".png")
purrr::map2(urls, pngs, webshot::webshot)
```

```
## [[1]]
##
## [[2]]
##
## [[3]]
```

`image_crop()` をそのまま使っても便利ではあるが、切り出しサイズ・位置の指定方法がどうも個人の性に合わない。そのためラッパー関数で、切り出したい左上の位置と右下の位置を指定できるようにする。切り出しの左上と右下の位置は、画像編集ソフトなどで別途確認する。

もし、切り出しの位置の細かな設定が面倒であれば、いくつかのパターンを作っておき、総当たりに画像を切り出して、その中から求めるものを探す方法もある。その場合は、出力したファイルがどの設定によるものか分かるように、出力するファイル名に位置情報を付与しておくとも良いだろう。

```
magick_crop <- function(image, left_top, right_bottom){
  left   <- left_top[1]
  top    <- left_top[2]
  right  <- right_bottom[1]
  bottom <- right_bottom[2]
  geometry <- paste0(right - left, "x", bottom - top, "+", left, "+", top)
  magick::image_crop(image, geometry)
}
```

今回は切り出し位置として2つ使う。1つ目は、`rvest_1.png` と `rvest_2.png` で使うもので、2つ目は、`rvest_3.png` で使うものである。それぞれの正しい設定だけを使ってコードを書いても良いが、面倒なのでとりあえず2つの位置を使って、画像を3つとも変換してしまう。変換後に実際に必要な画像だけを使えば良い。

ところで、magick パッケージの関数ベクトルに対応しているので、文字列のベクトルである pngs でもそのまま引数として使うことができる。ただし、2つのベクトルを引数に使うことはできないため、以下では map2 を使っている。また、その直前で返り値をリストに変換するために as.list() を使っている。

```
crop_1 <-
  magick::image_read(pngs) %>%
  magick_crop(c(100, 0), c(890, 560)) %>%
  as.list() %>%
  purrr::map2_chr(., paste0("crop1_", pngs), magick::image_write)
crop_2 <-
  magick::image_read(pngs) %>%
  magick_crop(c(100, 0), c(890, 980)) %>%
  as.list() %>%
  purrr::map2_chr(., paste0("crop2_", pngs), magick::image_write)
crops <- c(crop_1[c(1,2)], crop_2[3])
```

ここでは、image_crop() を使用したが、上下左右から変化がない部分を除去する image_trim() という関数がある。余白部分 (色は白だけとは限らない) を単純に除去するだけであれば、位置を指定する必要のない image_trim() の方が楽である。

サイズの変更

画像サイズを変更するには、image_scale() を使う。geometry = "200" で幅 200 ピクセルに、geometry = "x200" で高さ 200 ピクセルに変更できる。なお、縦横比を保ったままである。

```
resizes_crops <-
  magick::image_read(crops) %>%
  magick::image_scale(geometry = "600")
```

枠 (余白) の追加・註釈 (テキスト) の追加

画像に枠 (余白) と註釈 (テキスト) をつけるには、それぞれ image_border() と image_annotate() を使う。image_border() で geometry = "x40" は上下に、geometry = "40" は左右に 40 ピクセルの枠を追加する。image_annotate() は位置 location, 角度 degrees, 文字サイズ size, フォント font など指定可能である。

```
borders_annotates <-
  resizes_crops %>%
  magick::image_border("white", geometry = "x40") %>%
  as.list() %>%
  purrr::map2(., urls, magick::image_annotate, size = 20)
```

その他の関数

magick には、他にも有用な関数がたくさんある。

image_append(image, stack = FALSE)	# 並べて表示, stack = TRUE で縦並べ
image_background(image, color)	# 背景の色付け
image_rotate(image, degrees)	# 回転
image_blur(image, radius, sigma)	# ぼかし処理. radius, sigma: ぼかしの大きさ
image_noise(image, noisetype)	# ノイズの追加
image_charcoal(image, radius, sigma)	# 縁取り
image_oilpaint(image, radius)	# 油絵
image_edge(image, radius)	# エッジ
image_negate(image)	# ネガ
image_morph(image, frames)	# 画像を指定した frames 間隔

```
image_animate(image, fps, loop)      # image_morph() 画像のアニメ化, fps: frames/秒, `loop = 1`で繰り返し.
```

ウェブのスクリーンショットに URL を付加する関数

これまでの内容をもとに、ウェブのスクリーンショットに URL を付加する関数を作成する。主な流れは次のとおりである。

- 一時ファイル名を生成
- 一時ファイルに URL で指定したウェブのスクリーンショットを保存
- スクリーンショットを読み込み、一時ファイルの削除
- 余白のトリミング (オプション)
- URL を書き込む白色の枠を上下に追加
- URL の追加
- 下側の白色の枠の削除
- 形式の変換 (オプション)
- サイズの変更 (オプション)

```
#' Download screenshot image from web based on URL and add text annotation of URL on the top of the image.
#'
#' Needs
#'
#' @param url      A string of URL.
#' @param trim     A logical if trim image by magick::image_trim().
#' @param border_size A string of border size. "x40": Set border on the top for annotation.
#'                Will be passed like magick::image_border(img, "white", geometry = border_size)
#' @param annotate_size A string of annotation size.
#'                Will be passed like magick::image_annotate(img, url, size = annotate_size)
#' @param format    A string of format of image.
#'                Will be passed like magick::image_convert(img, format = format)
#' @param resize    A string for resize by magick::image_scale().
#'                Passed like magick::image_scale(geometry = resize).
#' @return         An magick-image object.
#' @examples
#' # install.packages("magick")
#' # install.packages("webshot")
#' url <- "https://www.deepl.com/translator"
#' tmp <- web_screenshot(url, format = "png")
#' magick::image_browse(tmp)
#' magick::image_write("deepl.png")
#'
#' @export
web_screenshot <- function(url, trim = TRUE, border_size = "x40", annotate_size = 20, format = "png", resize = "x100%",
  png <- paste0(fs::file_temp(), ".png")
  webshot::webshot(url, png)
  img <- magick::image_read(png)
  file_delete(path)
```

```

if(trim){ img <- magick::image_trim(img) }
  # add top margin (removed bottom margin by image_crop)
img <- magick::image_border(img, "white", geometry = border_size)
crop_size <- stringr::str_split(border_size, pattern = "x", simplify = TRUE)[2]
h <- magick::image_info(img)$height - as.numeric(crop_size)
img <- magick::image_crop(img, geometry = paste0("x", h))
img <- magick::image_convert(img, format = format)
  # add annotation
img <- magick::image_annotate(img, url, size = annotate_size)
if(resize != FALSE){ img <- magick::image_scale(geometry = resize) }
return(img)
}

```

reticulate

R と Python のパッケージは、相互に移植されていることが多い。例えば、Python の logging(と R の futile.logger) をもとに R のパッケージ logger は開発されている。 <https://cran.r-project.org/web/packages/logger/index.html> また、R の ggplot2 や dplyr は Python にも移植されている。

ただし、どちらか片方でしか利用できなかったり、使用方法が難しいことがある。そんなとき、ちょっとだけ使うのであれば、R のパッケージ reticulate が便利である。もちろん、Python をちゃんと勉強するのも良いだろう。さらに、reticulate を使うと R と Python との変数のやり取りが簡単にできるので、本格的に Python を使うのにも良さそう。

準備 : Python のインストール

準備 : Python でのモジュール (パッケージ) のインストール

Rstudio で python を書く (reticulate) https://qiita.com/Wa__a/items/42129e529cfb6c38e046

py_install() や conda_install() でパッケージがインストールできないとき - pip でパッケージをインストール

- pip でインストールできた python を reticulate::use_python() で指定

準備 - Python のインストール

- pdf2docx のインストール

pip install pdf2docx

実行

```

# pdf2docx の読み込みでエラーになるとき
# reticulate::use_python() で python を指定
# pip で pdf2docx がインストールできた python を使う
library(reticulate)
# reticulate::py_install("pdf2docx") エラー
# https://anaconda.org/conda-forge/python-docx
# reticulate::conda_install(channel = "conda-forge", packages = "python-docx") # できたけど, pdf2docx
reticulate::use_python("C:/Python/Python39/python.exe")
reticulate::py_run_string("from pdf2docx import parse")
reticulate::py_run_string("pdf_file = 'D:/a.pdf'")

```

```
reticulate::py_run_string("docx_file = 'D:/a.docx'")
reticulate::py_run_string("parse(pdf_file, docx_file)")
```

Pytho と R との変数のやり取り

variable は変数名

```
# RからPythonへ(Pythonで取り出し)
r.variable
```

```
# PythonからRへ(Rで取り出し)
py$variable
```

DBI でデータ取得

データベースとの連携

リレーショナル・データベースと接続してデータを取得するためのパッケージには色々ある。

CRAN Task View: Databases with R には多くのパッケージが掲載されている。 <https://cran.r-project.org/web/views/Databases.html>

どれを使っても良いが、よく使われているのは DBI のようだ。 <https://cran.r-project.org/web/packages/DBI/index.html>

DBI でできること

- 各種データベースとの接続
- SQL によるデータ操作

SQL を使い慣れていれば、SQL で各種の操作をするのが良いだろう。一方、R でのデータフレームの操作に慣れていれば、取得したデータを R で操作するのが良い。つまり、データ取得だけに DBI を利用して、その後は dplyr や tidyverse の各種パッケージの関数を駆使してデータを処理する。さらに、その結果を明示したい場合は、ggplot2 を使うと良い。

準備

```
install.packages(c("DBI", "RSQLite"))
```

```
library(DBI)
library(RSQLite)
library(tidyverse)
```

```
## -- Attaching core tidyverse packages ----- tidyverse 2.0.0 --
## v dplyr      1.1.2      v readr      2.1.4
## v forcats    1.0.0      v stringr   1.5.0
## v ggplot2    3.4.2      v tibble    3.2.1
## v lubridate  1.9.2      v tidyr     1.3.0
## v purrr      1.0.1
## -- Conflicts ----- tidyverse_conflicts() --
## x dplyr::filter() masks stats::filter()
## x dplyr::lag()     masks stats::lag()
## i Use the conflicted package (<http://conflicted.r-lib.org/>) to force all conflicts to become errors
```

```
# 一時的データの準備
con <- dbConnect(RSQLite::SQLite(), dbname = ":memory:")
dbWriteTable(con, "mpg", mpg)
dbListTables(con)
```

```
## [1] "mpg"
```

使い方

```
# SQL で選択・フィルタ
res <- dbSendQuery(con, "SELECT year, model, displ, cyl FROM mpg WHERE cyl = 4")
df <- dbFetch(res)
dbClearResult(res)
tibble::as_tibble(df)
```

```
## # A tibble: 81 x 4
##   year model      displ  cyl
##   <int> <chr>    <dbl> <int>
## 1 1999 a4         1.8     4
## 2 1999 a4         1.8     4
## 3 2008 a4          2     4
## 4 2008 a4          2     4
## 5 1999 a4 quattro  1.8     4
## 6 1999 a4 quattro  1.8     4
## 7 2008 a4 quattro  2     4
## 8 2008 a4 quattro  2     4
## 9 1999 malibu    2.4     4
## 10 2008 malibu    2.4     4
## # i 71 more rows
```

```
# とりあえず全部取得してから, dplyr で選択・フィルタ
res <- dbSendQuery(con, "SELECT * FROM mpg")
df <- dbFetch(res)
dbClearResult(res)
df %>%
  tibble::as_tibble() %>%
  print() %>%
  dplyr::select(year, model, displ, cyl) %>%
  dplyr::filter(cyl == 4) %>%
  head()
```

```
## # A tibble: 234 x 11
##   manufacturer model      displ  year  cyl trans drv      cty  hwy fl      class
##   <chr>          <chr>    <dbl> <int> <int> <chr> <chr> <int> <int> <chr> <chr>
## 1 audi          a4         1.8  1999   4 auto~ f      18   29 p      comp~
## 2 audi          a4         1.8  1999   4 manu~ f      21   29 p      comp~
## 3 audi          a4          2   2008   4 manu~ f      20   31 p      comp~
## 4 audi          a4          2   2008   4 auto~ f      21   30 p      comp~
## 5 audi          a4         2.8  1999   6 auto~ f      16   26 p      comp~
## 6 audi          a4         2.8  1999   6 manu~ f      18   26 p      comp~
## 7 audi          a4         3.1  2008   6 auto~ f      18   27 p      comp~
## 8 audi          a4 quattro  1.8  1999   4 manu~ 4      18   26 p      comp~
## 9 audi          a4 quattro  1.8  1999   4 auto~ 4      16   25 p      comp~
## 10 audi          a4 quattro  2    2008   4 manu~ 4      20   28 p      comp~
```



```
## # i 224 more rows
## # A tibble: 6 x 4
##   year model      displ    cyl
##   <int> <chr>      <dbl> <int>
## 1  1999 a4          1.8     4
## 2  1999 a4          1.8     4
## 3  2008 a4          2       4
## 4  2008 a4          2       4
## 5  1999 a4 quattro  1.8     4
## 6  1999 a4 quattro  1.8     4
```

SQL 使いの方は、「SQL では始めるデータ分析クエリで行う前処理、時系列解析、コホート分析、テキスト分析、異常検知」を参考にして SQL でデータ処理をするのも良いだろう。しかし、R 使いにとっては dplyr や ggplot2 を使って処理するほうが楽だと思われる。dplyr や ggplot2 を使ったデータ分析には、「R では始めるデータサイエンス」が参考になる。 <https://r4ds.hadley.nz/>

その他、DBI パッケージの詳細は以下を参照。

<https://cran.r-project.org/web/packages/DBI/vignettes/DBI-1.html>

xlsx でエクセル操作




xlsx パッケージを使うと、エクセルのファイルの読み込み・書き込みをはじめ、オートフィルタの設定やウィンドウ枠の固定などの各種操作が可能である。

オートフィルタの設定とウィンドウ枠の固定の自動化スクリプト

xlsx の使用例として、オートフィルタを設定して・ウィンドウ枠を固定する自動化スクリプトを作成した。

使用方法

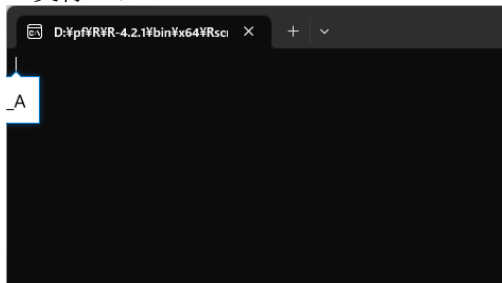
- 準備：R のインストール
- 準備：set_autofilter_freezepanel.rsc をダウンロード (右クリックして「名前を付けてリンク先を保存」) して、任意のフォルダに保存。
- 準備：スクリプトの関連付けを参考にして、「.rsc」を「Rscript.exe」に関連付けする (Windows の場合)。Mac の場合は、Mac - 拡張子に関連付けられているアプリを変更する方法などを参考にしてほしい。
- set_autofilter_freezepanel.rsc と同じフォルダに、処理したいエクセルのファイルを保存。

名前	更新日時	種類	サイズ
 book1.xlsx	2023/04/10 12:22	Microsoft Excel ワ...	10 KB
 book2.xls	2023/04/10 12:22	Microsoft Excel 97...	29 KB
 set_autofilter_freezepanel.rsc	2023/04/09 9:55	RSC ファイル	1 KB

- 実行前のエクセルのファイル



- set_autofilter_freezepanel.rsc をダブルクリックして実行すると、黒い画面が表示されてプログラムが実行される。



プログラムが自動的にエクセルのファイルの 1 行目の A 列から Z 列までにオートフィルタを設定し、1 行目と 1 列目でウィンドウ枠を固定する。複数ファイル・複数シートにも対応している。

なお、初回実行時は、xlsx パッケージのダウンロードのため、少し時間がかかるかもしれない。2 回目以降はファイル数が多すぎなければ、一瞬で処理されるはず。

実行後のエクセルのファイル



スクリプトの内容説明

```
# Package, 準備
if(! "xlsx" %in% installed.packages()[,1]){ # xlsx パッケージ有無の確認
# パッケージが無い場合
options(repos = "https://cran.ism.ac.jp/") # ミラーサイトの設定
install.packages("xlsx") # パッケージのインストール
}

# Functions, 関数
# 註: xlsx パッケージの関数は返り値の代入がない
# 副作用でシートなどを操作するため?
# 参照型を使っているため?
# 参考: 通常の R の関数は, 返り値の代入をすることが多いの

# オートフィルタの設定
set_auto_filter <- function(sh){
# A1 から Z1 までを設定
# もっと多くの列で設定したければ, "A1:Z1" のところを修正する
xlsx::addAutoFilter(sh, "A1:Z1")
}

# ウィンドウ枠の固定
set_freeze_panel <- function(sh){
# 1 列目と 1 行目のウィンドウ枠を固定
# 固定する場所の変更方法
# 2 行目までを固定したい場合は, 引数の 2 つ目と 4 つ目を, 3 にする
# 3 列目までを固定したい場合は, 引数の 3 つ目と 5 つ目を, 4 にする
xlsx::createFreezePane(sh, 2, 2, 2, 2)
}

# ワークブックごとで設定
set_af_fp <- function(file){
wb <- xlsx::loadWorkbook(file) # ワークブックの読み込み
for(sh in xlsx::getSheets(wb)){ # シートの数だけ繰り返し
set_auto_filter(sh) # オートフィルタの設定
set_freeze_panel(sh) # ウィンドウ枠の固定
}
xlsx::saveWorkbook(wb, file) # ワークブックの保存
}

# Main, 本体
files <- list.files(pattern = "xls") # ".xls" と "xlsx" の一覧取得
for(file in files){ # ファイルの数だけ繰り返し
set_af_fp(file) # set_af_fp() の実行
}
```

その他の操作 (未作成)

qpdf で PDF 操作

準備

いつものように、まずパッケージをインストールする。qpdf は PDF 操作のためのパッケージである。著者作パッケージである automater をインストールするが、これは CRAN には登録していない。いずれは CRAN に登録したいと思っているが、現段階では GitHub で公開している。そのため、install.packages() ではなく、devtools::install_github() を使ってインストールする。

```
install.packages("qpdf")
install.packages("devtools")
devtools::install_github("matutosi/automater")
```

```
library(tidyverse)
library(qpdf)
library(automater)
```

qpdf でできること

qpdf パッケージでは、PDF ファイルのページ分割・抽出・結合・回転・圧縮・重ね合わせが可能である。あくまでページ単位での操作で、PDF に含まれるテキスト自体の編集はできない。ページ単位での PDF 操作は、Adobe Acrobat でなくても CubePDF Utility や Pdftk を使えば可能である。Pdftk はコマンドラインでの操作も可能であるため、大量の操作をするには適している。とはいえ、R やそのパッケージで操作が自動化できればさらに便利である。

なお、PDF 関連の他のパッケージとしては Rpoppler や pdftools がある。Rpoppler ではテキストの抽出ができる。pdftools ではテキストの抽出、OCR(画像の文字認識、内部で tesseract パッケージを使用)、PDF ファイルの分割・結合(内部で qpdf パッケージを使用)、画像ファイルへの変換などができる。また、Microsoft365R を使えば PDF をワードに変換できる。

余談であるが、R のパッケージはそれぞれ独自コードを持つ部分がある一方で、他のパッケージの関数をインポートしているものや、ラッパー関数を用意しているものなどがある。例えば、automater ではそれ自体で有用な機能を持っているというよりは、他のパッケージを利用しやすくするためのラッパー関数の集合である。そのため、automater のコードをもとにさらに使いやすく改良可能であり、各自で試してほしい。

PDF の分割

PDF の分割は非常に簡単である。pdf_split() 関数に input 引数として分割するファイルを、output 引数として出力パスを指定すれば良い。パスワードが必要な場合は、引数 password を指定する。

```
# wd <- "set_your_directory"
# setwd(wd)
review <- curl::curl_download("https://www.jstage.jst.go.jp/article/vegsci/31/2/31_193/_pdf/-char/ja", )
split_pdf <- qpdf::pdf_split(review)
head(split_pdf)
```

ファイル名の文字列のベクトルが返り値なので、それをもとにしてファイル名を変更すると実用的な自動化ができるだろう。

ページを指定した抽出も可能で、pdf_subset() 関数を使用する。引数として pages を指定する以外は、pdf_split() と同じ使い方である。

```
# 指定ページを抽出, create a new pdf with a subset of the input pages
pdf_subset(input, pages = 1, output = NULL, password = "")
```

以下の内容は、パッケージ automater の inst/rsc ディレクトリにある split_qpdf.rsc の内容である。拡張子.rsc を Rscript に関連付けすれば、split_qpdf.rsc と同じフォルダに保存した PDF ファイルを split_qpdf.rsc をクリックするだけで分割できる。拡張子の関連付けは、スクリプトの関連付けを参照して欲しい。

```
system.file("rsc/split_qpdf.rsc", package = "automater") %>%
  readLines() %>%
  paste0(collapse = "\n") %>%
  cat()

## # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # #
## #
## # See https://github.com/matutosi/automater/blob/main/vignettes/split_qpdf.md
## #
## # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # # #
##
## # Prepare
## pkg <- "devtools"
## if(! pkg %in% installed.packages()[,1]){
##   install.packages(pkg, repo = "https://cran.ism.ac.jp/")
## }
##
## pkg <- "automater"
## ver <- utils::packageDescription(pkg, fields = "Version")
## if(utils::compareVersion(ver, "0.2.0") < 0){
##   devtools::install_github("matutosi/automater", upgrade = "never", force = TRUE)
## }
##
## automater::validate_package("qpdf")
## automater::validate_package("stringr")
##
## # Run
## files <- list.files(pattern = "\\*.pdf")
## for(file in files){
##   output <- qpdf::pdf_split(file)
##   n_page <- qpdf::pdf_length(file)
##   extra <- 0 # to avoid duplicated file name, add extra digits
##   numbered <- automater::file_numbered(file, n_page, extra = extra)
##   while(automater::is_duplicated(files, numbered)){
##     extra <- extra + 1
##     numbered <- automater::file_numbered(file, n_page, extra = extra)
##   }
##   file.rename(output, numbered)
## }
##
## automater::message_to_continue()

# system.file("rsc/split_qpdf.rsc", package = "automater") %>%
#   readtext::readtext(verbosity = 0) %>%
#   `[["text") %>%
#   cat()
```

具体的な方法は次のとおりである。 - split_qpdf.rsc をディレクトリーに保存する - 以下のコードで split_qpdf.rsc をコピー可能

```
file <- "split_qpdf"
path <- "c:/" # set your path
automater::set_rsc(file, path)
```

- 拡張子.rsc を Rscript.exe に関連付ける
- 分割したい PDF ファイルを split_qpdf.rsc と同じディレクトリにコピーする
- split_qpdf.rsc をクリックする
- 黒いウィンドウが開くので、しばらく待つ

split_qpdf.rsc を初めて実行するときは、パッケージのインストールに時間がかかることがある。出力ファイル名は以下のとおりである。- 入力: 「original.pdf」(15 ページ) - 出力: “original_01.pdf”, “original_02.pdf”, …, “original_15.pdf”

PDF の結合

結合させる場合は、input 引数に結合させたいファイル名を指定する。それ以外は、pdf_split() と同様である。

```
# 結合, join several pdf files into one
pdf_combine(input, output = NULL, password = "")
```

特定のディレクトリ内の PDF ファイルを 1 つの PDF ファイルとして結合することを自動化するスクリプトは以下のとおりである。

```
system.file("rsc/combine_qpdf.rsc", package = "automater")
```

```
## [1] "D:/pf/R/R-4.3.0/library/automater/rsc/combine_qpdf.rsc"
```

```
readLines() %>%
paste0(collapse = "\n") %>%
cat()
```

- combine_qpdf.rsc をディレクトリに保存
 - 以下のコードで、combine_qpdf.rsc をコピー可能

```
file <- "combine_qpdf"
path <- "c:/" # set your path
automater::set_rsc(file, path)
```

- 拡張子.rsc を Rscript.exe に関連付ける
- 結合したい PDF ファイルを combine_qpdf.rsc と同じディレクトリにコピーする
ファイルの結合順はファイル名の順序と同じ
- combine_qpdf.rsc をクリックする
- 黒いウィンドウが開くので、しばらく待つ
初めて実行するときは、パッケージのインストールに時間がかかることがある。
- 結合したファイル名は以下のとおりである。
出力: 「combined_ “2020-11-27_12_00_00.pdf”」(結合した日付・時刻)

PDF ファイルの結合順はファイル名の順序と同じなので、fs::dir_ls() でファイル名一覧を取得し、file_move() で名前を変更する必要がある。さらに、このあたりも自動化するには、ユーザからの入力を受け取り、それをもとにファイル名の順序を決めれば良い。

```
# wd <- "set_your_directory"
# setwd(wd)
library(tidyverse)
```

```

input_files <- function(files){
  len <- length(files) %>% log10() %>% ceiling()
  no <- stringr::str_pad(seq(files), width = len, side = "left")
  prompt <-
    files %>%
    paste0(no, ": ", .) %>%
    paste0(collapse = "\n") %>%
    paste0("\n結合するファイルを番号で指定してください（カンマ区切り）. \n 例：3,1,2\n") %>%
    cat()
  input_order <-
    user_input(prompt) %>%
    stringr::str_split(",") %>%
    unlist() %>%
    as.numeric()
  files[input_order]
}
user_input <- function(prompt){
  if (interactive()) {
    return(readline(prompt))
  } else {
    cat(prompt)
    return(readLines("stdin", n=1))
  }
}

files <- fs::dir_ls(regex = "\\\\.pdf")
input <- input_files(files)
input

automater::message_to_continue()

```

上のコードの `input_files()` では、ファイル名の一覧からファイル数を取り出し、ファイル番号を画面表示用に桁揃えしている。その後、ファイル番号とファイル名、さらにユーザへの註釈を結合して、プロンプトに表示するメッセージ文字列を生成する。メッセージを `user_input()` を用いて表示するとともに、ユーザからの入力を受け取る。入力された文字列を数値にして、ファイルの順序を決めている。

このコードの `input` を `pdf_combine(input)` として使えば、ユーザ入力をもとにして PDF ファイルを結合するスクリプトができる。入力する番号が数個であれば、これでも良いがもっと多くのファイルになった場合は現実的には使いにくい。多くのファイルを結合する場合は、以下のような方法で実装すると良いだろう。

- `fs::dir_ls(regex = "\\\\.pdf")` でファイル名の一覧を入手
- 一覧をもとに 1 行ごとに 1 つのファイル名のテキストファイルとして保存
- テキストファイルをユーザが並び替える (R では並び替えが終わるまで待機)
- 並び替えが終われば、R で Enter(他のキーでも OK) を入力
- テキストファイルを読み込み、や `combine_qpdf()` (`pdf_combine()` でも OK) で PDF を結合

PDF の圧縮・最適化

`pdf_compress()` は圧縮とともに、最適化 (Linealizer) してくれる。最適化されていない PDF はファイルを全部読み込まないと表示できないのに対して、最適化された PDF は最後まで読み込みが完了しなくても

ページ表示できる。ネット上にある重い PDF を表示させる場合に特に役立つ。使い方は次のとおりである。詳細な説明は不要だろう。

```
# 圧縮, compress or linearize a pdf file
pdf_compress(input, output = NULL, linearize = FALSE, password = "")
```

PDF へのページ番号付加

pdf_overlay_stamp() を使うと、PDF ファイルに別の PDF ファイルを重ね合わせることができる。

```
pdf_overlay_stamp(input, stamp, output = NULL, password = "")
```

引数 input にはベースとなる PDF ファイルを、stamp には重ね合わせる PDF ファイルを指定する。stamp として「部外秘」「資料 1」などを記載した PDF ファイルをあらかじめ準備しておく。input の各ページに stamp の 1 ページ目が重ね合わせられる。

これだけでも十分便利な機能であるが、さらに便利に使いたい。例えば、ベースの PDF ファイルの各ページにページ番号を入力したい。ページ番号でなくて別の通し番号を使いたいときもあるだろう。例えば、学会の発表要旨集で左上に「A01」「A02」のような会場番号と通し番号を使うことが多い。さらに欲をだして、重ね合わせの開始・終了ページを指定するようにしたい。

これらの内容を実行するコードは次のとおりである。

```
#' Wrapper functions to overlay page numbers and others using package qpdf.
#
#' pdf_overlay_stamps_each() overlay PDF for each page in pdf file.
#' validate_page() is a helper function for pdf_overlay_stamps_each()
#' to validate page consistency of among page no. of input, stamp, start and end.
#' pdf_overlay_page_num() and pdf_overlay_session_num() are wrapper functions to
#' overlay page no. and session no. for accademic congress or symposium etc.
#' pdf_overlay_page_num() can overlay up to 100 pages.
#
#' Package qpdf <https://cran.r-project.org/web/packages/qpdf/index.html>
#' includes useful functions as shown bellow.
#' pdf_length(), pdf_split(), pdf_subset(), pdf_combine(),
#' pdf_compress(), pdf_rotate_pages(), pdf_overlay_stamp().
#
#' @name pdf_overlay
#' @param input,stamp A string of file name or path of pdf file.
#' input is a base pdf and stamp will be overlayed.
#' No. of pages in stamp PDF should be equal to or over no. of pages in input PDF.
#' Pages in stamp exceeding pages over input pages will be ignored.
#' @param start,end An integer of start and end page to be stamped.
#' negative integer can be used for end, which means
#' number from the last page.
#' @param session A string of session name. Can use "a", "b", or "p".
#' 'session = "a"' uses 'pdf/00_sn_a.pdf' as stamp.
#' pdf directory include '00_sn_a.pdf', '00_sn_b.pdf', and '00_sn_p.pdf'
#' by default, which invlude 50 pages (eg., A01, A02, ..., A50) respectively.
#
#' @examples
#' \dontrun{
#' input <- system.file("pdf/00_sn_a.pdf", package = "automater")
#' pdf_overlay_page_num(input, start = 11, end = -3)
#' pdf_overlay_session_num(input, session = "b")
#' }
#'
```

```

#' @return A string of output pdf file.
#' @export
pdf_overlay_stamps_each <- function(input, stamp, start = 1, end = NULL){
  len_input <- qpdf::pdf_length(input)
  len_stamp <- qpdf::pdf_length(stamp)
  if(is.null(end)){ end <- len_input }
  if(end < 0 ){ end <- len_input + end}
  validate_page(len_input, len_stamp, start, end)
  pages_inputs <- seq(to = len_input)
  # +1 means out of bounds, inputs[pages_pre]: NA
  pages_pre <- if(start != 1 ){ seq(to = start - 1) } else { len_input + 1 }
  pages_post <- if(end != len_input){ seq(from = end + 1, to = len_input)} else { len_input + 1 }
  pages_body <- pages_inputs[-c(pages_pre, pages_post)]
  inputs <- qpdf::pdf_split(input)
  stamps <- qpdf::pdf_split(stamp)
  out <- list()
  for(i in seq_along(pages_body)){
    out[[i]] <- qpdf::pdf_overlay_stamp(inputs[pages_body[i]], stamps[i])
  }
  out <- stats::na.omit(c(inputs[pages_pre], unlist(out), inputs[pages_post]))
  outfile <- qpdf::pdf_combine(out, "out.pdf")
  file.remove(inputs)
  file.remove(stamps)
  file.remove(out[pages_body])
  return(outfile)
}

#' @rdname pdf_overlay
#' @export
validate_page <- function(len_input, len_stamp, start, end){
  if(end < start) { stop("end must be larger than start!") }
  if(len_input < start) { stop("input pages must be larger than start!") }
  if(len_input < end ) { stop("input pages must be larger than end!") }
  if(len_input > len_stamp){ stop("stamp pages must be equal to or bigger than input!") }
}

#' @rdname pdf_overlay
#' @export
pdf_overlay_page_num <- function(input, start = 1, end = NULL){
  stamp <- file.path(find.package("automater"), "pdf/00_page.pdf")
  pdf_overlay_stamps_each(input, stamp, start, end)
}

#' @rdname pdf_overlay
#' @export
pdf_overlay_session_num <- function(input, start = 1, end = NULL, session = "a"){
  stamp <- file.path(find.package("automater"), "pdf/00_sn_", session, ".pdf")
  pdf_overlay_stamps_each(input, stamp, start, end)
}

```

pdf_overlay_stamps_each() の引数には、input, stamp, start, end がある。input と stamp は qpdf の他の関数と同様の引数で、ファイルのパスを文字列で指定する。start と end は、input での重ね合わせ対象とするページ数の開始・終了ページで、整数で指定する。最後からのページ数とするには、end を負の数で指定する。

関数の主な構成は以下のとおりである.

- input と stamp のページ数を取得
- start や end との整合性を validate_page() で確認
- 重ね合わせ対象よりも前 (pages_pre), 後ろ (pages_post), 重ね合わせの対象のページ (pages_body) を取得
- pdf_split() で input と stamp を 1 ページごとに分割
- pages_body の部分のみ, stamp の各ページを重ね合わせ
- combine_pdf() で使うためのファイル名を結合 (pages_pre, pages_body, pages_post)
- combine_pdf() でファイルの結合
- 使用後のファイルを削除
- 結合したファイル名を返す

なお, ページ番号と学会でのセッション番号を付与するためのラッパー関数として, それぞれ pdf_overlay_page_num() と pdf_overlay_session_num() がある. pdf_overlay_page_num() は, input の PDF だけ指定すれば全ページに番号を付加し, start と end が指定可能である. ただし, 最大ページ数は 100 ページである. pdf_overlay_session_num() は, さらに session を指定して「A01」のような番号を左上に付加する.

```
pdf_overlay_page_num(input, start = 1, end = NULL) pdf_overlay_session_num(input, start = 1, end = NULL, session = "a")
```

パッケージ automater の pdf フォルダには, ページ番号と学会でのセッション番号を付加するための PDF ファイル (すべて A4 版) がある. - 00_page.pdf - 00_sn_a.pdf, 00_sn_b.pdf, 00_sn_p.pdf ページ番号は, 下部に「-1-」などの表記があり 100 ページ分からなる. セッション番号は, 左上に「A01」(A 会場を想定)「B01」「P01」(ポスター会場を想定)などの表記があり, 50 番までが入っている. それぞれの tex ソースファイルも保存されている. tex を使うのが難しければ, ワードなどで同様の書式のファイルを作成したものを PDF として保存すれば良い.

その他の関数

これまでで説明した以外に, qpdf には pdf_length() と pdf_rotate_pages() がある. pdf_length() は入力した PDF ファイルのページ数を返す. pdf_rotate_pages() は PDF ファイルのページを 90 度単位で回転できる. angle で時計回りの角度を指定する. relative が TRUE のときは入力時点での角度からの相対的な角度で回転し, FALSE のときは angle = 0 のときは縦長で angle = 90 のときは横長になる.

```
pdf_length(input, password = "")
pdf_rotate_pages(input, pages, angle = 90, relative = FALSE, output = NULL, password = "")
```

pdf を docx に変換

RDCOMClient

<https://github.com/omegahat/RDCOMClient> CRAN にはないが,

インストール

```
install.packages("RDCOMClient",
  repos = "http://www.omegahat.net/R",
  type = "win.binary")
```

変換実行

<https://stackoverflow.com/questions/32846741/convert-pdf-file-to-docx/73720411#73720411>

```
library(RDCOMClient)
wordApp <- COMCreate("Word.Application")
wordApp[["Visible"]] <- TRUE
wordApp[["DisplayAlerts"]] <- FALSE
path_To_PDF_File <- "xxx.pdf"
```

```
path_To_Word_File <- "xxx.docx"
doc <-
  wordApp[["Documents"]]$Open(normalizePath(path_To_PDF_File),
    ConfirmConversions = FALSE)
doc$SaveAs2(path_To_Word_File)
```

ラッパー関数

```
library(RDCOMClient)
pdf2docx <- function(pdf, docx = NULL){
  if(is.null(docx)){
    docx <- paste0(getwd(), sub("pdf", "docx", pdf))
  }
  wordApp <- RDCOMClient::COMCreate("Word.Application")
  wordApp[["Visible"]] <- TRUE
  wordApp[["DisplayAlerts"]] <- FALSE
  doc <-
    wordApp[["Documents"]]$Open(normalizePath(pdf), ConfirmConversions = FALSE)
  doc$SaveAs2(docx)
  doc$close()
}

wd <- "d:/matu/work/tmp/"
setwd(wd)
path_docx <- function(path_pdf){
  if(grepl("[A-z]:", path_pdf)){
    return(sub("pdf", "docx", path_pdf))
  }
  path <- file.path(getwd(), sub("pdf", "docx", path_pdf))
  return(sub("//", "/", path))
}

testthat::expect_equal(path_docx("a.pdf"), "d:/matu/work/tmp/a.docx")
testthat::expect_equal(path_docx("d:/matu/work/tmp/a.pdf"), "d:/matu/work/tmp/a.docx")
testthat::expect_equal(path_docx("test/a.pdf"), "d:/matu/work/tmp/test/a.docx")
testthat::expect_equal(path_docx("/test/a.pdf"), "d:/matu/work/tmp/test/a.docx")

wd <- "d:/"
setwd(wd)
pdf2docx("a.pdf")
```

pdf2docx

Microsoft365R

Outlook で複数メール送信を一斉送信

複数人に全く同じメールを送る場合は、TO や CC に複数の電子メールアドレスを入力すれば良い。また、宛先を知られるのがよろしくないときは、BCC に送信先のアドレスを、TO に自分のアドレスを入れておけば問題ない。このとき、送り先の全員に全く同じ内容、同じ添付ファイルであればメールは1つ作成すれば問題ない。

でも、個々の人に対して少しだけ違う内容のメールを送りたいときとか、添付ファイルを別々のものにし

たいときがある。また、単純なことだが、宛先が「みなさま」よりは、「様」のように宛先だけでも変更したいというときもある。何かお願いをするときには、「みなさま」よりも直接名前を書いたほうが結構効果が高い。例えば、学会での投票のお願いなどは、MLに流すより個別メールの方が確実だ。

そのようなとき、いちいちメールを作成・編集していると面倒だし、間違いのもとになる。名前を中途半端に修正して、3箇所のうち1箇所だけ別の人の名前にしてしまっていたり、日付と曜日があっていないなどの間違いは日常茶飯事だ。このような間違いをなくすには、個別に変更する部分と全体で統一するところを分けておき、あとはパソコンを使ってうまくつなぎ合わせる。でも、このように作成したメールの本文や宛先をいちいちコピー & ペーストするのは、手間がかかるし、個々にも作業のミスが入り込む余地が大きい。

インストールと初期設定

この操作は、最初に1回だけ実行すればOK。

```
# インストール
install.packages("Microsoft365R")
# パッケージの読み込み
library(Microsoft365R)
# 会社など組織で契約している場合
Microsoft365R::get_business_outlook()
# 個人利用の場合
# Microsoft365R::get_personal_outlook()
```

とりあえず使う

まずは、試しにメールを作って送ってみる。

```
# 会社などで組織で契約している場合
outlook <- Microsoft365R::get_business_outlook()
# 個人利用の場合
# outlook <- Microsoft365R::get_personal_outlook()

# 個別に email を送る場合
# メール作成のみ
# メールは outlook の下書きフォルダにも保存されている
em <-
  outlook$create_email(
    body = "Hello from R\nHello from R\n",
    subject = "Hello",
    to = "matutosi@gmail.com",
    cc = "matutosi@konan-wu.ac.jp"
  )

# メール送信
em$send()

# outlook の下書きフォルダからメールを取り出す
drafts <- outlook$get_drafts()$list_emails()
# 下書きフォルダのメール一覧
drafts
# 下書きフォルダのメールの 1 つ目を送信
drafts[[1]]$send()

# 受信トレイのメール一覧
inbox <- outlook$get_inbox()$list_emails()
```

```
# 受信トレイの 1 つ目の内容
inbox[[1]]
```

メールの一斉送信

宛先や本文をエクセルに入力しておき、そこからデータを抽出して一斉にメールを送信できる。

- 送信: send(必須) 1: 送信する, 0: 下書きに保存
- 宛先: to(必須)
- CC: cc(任意)
- BCC: bcc(任意)
- 件名: subject(必須でないが, 入力推奨)
- 本文: body(必須でないが, 入力推奨)
- 添付ファイル: attachment(任意)

宛先が入力されていないとメールは送信できない。CC と BCC は任意。

件名と本文はなくても送信できるが、両方とも何もないとメールの意味がない。

添付ファイルがあれば、ファイル名を指定。複数ファイルを添付するときは、カンマで path(ファイル名) を区切る。絶対 path で指定すると間違いは少ない。

```
# 宛先や本文をエクセルで作成しておき
# 一斉にメールを作成・送信する場合

# 関数の読み込み
source("https://gist.githubusercontent.com/matutosi/bed00135698c8e3d2c49ef08d12eef9c/raw/6acc2de844eeea")

outlook <- Microsoft365R::get_business_outlook()
# エクセルファイルの内容
# working directory にファイルがない場合は、
# 絶対パス ("c:/user/documents/outlook.xlsx" など) で指定
path <- "outlook.xlsx"
# メール作成・送信
create_email(path, outlook, send = TRUE)

# メール作成のみ
# "send = FALSE" にすれば、メールを作成して下書きに保存
create_email(path, outlook, send = FALSE)
```

複数のワード文書の文字列を一括置換

多くのプログラマは、普段はそれぞれの好みのテキストエディタを使っているだろう。私は Windows では古典的なエディタである秀丸エディタを長らく使っている。キー割り当てのカスタマイズや自分用の細かなマクロがあるので、今さらエディタを変更できない。ノートパソコンでは ThinkPad をずっと使っているの、キーボード自体も変更できない。これを変更すると作業効率が悪くなってしまう。そのため、デスクトップパソコンでも ThinkPad キーボードを愛用している。

このようにエディタとキーボードだけでパソコンの作業が完了すれば良いのだが、仕事上ワードで文書を作成しなければならないことがある。ワードは余計なおせっかいをたくさんしてくれるので、不要なことはしないように設定している。それでも、できればワードでの作業は最小限にしたいのが本音である。起動に時間はかかるし、置換で使える正規表現がちょっと変だからである。

R からワード文書内の文字列を置換すれば、ワードを起動する手間が省略できる。また、正規表現を使った置換や複数の組み合わせの置換もできる。さらに、「A を B」に「B を A」という入れ替えも、プログラムで途中に別の文字列への置き換えで実現できる。このとき途中で使う文字列が元の文書内にあることは必須条件であるが、これもプログラムで確認可能である。もちろん、複数ファイルでの置換やファイル名を正規表現で指定することもできる。

置換のコードの例

```
# https://ardata-fr.github.io/officeverse/index.html
# https://github.com/omegahat/RDCOMClient

# install.packages("officer")

pkg <- "D:/matu/work/ToDo/automater/R"
devtools::load_all(pkg)
library(officer)
library(tidyverse)
wd <- "d:/"
setwd(wd)

replacement <- read.table("replacement.txt", header = TRUE, sep = "\t")

files <-
  replacement[["file"]] %>%
  stringr::str_c(collapse = "|") %>%
  fs::dir_ls(regex = .) %>%
  exclude(stringr::str_detect(., "^replaced\\_"))

replacement <- expand_file(replacement, files)

files %>%
  purrr::walk(replace_docs, replacement)
```

年月日の更新

毎年同じような文書を作成しているが、年だけを更新しなければならないことは多いだろう。手作業で日付を更新すると、どうしても間違いが混入する。単純な見間違いや入力間違いもあれば、日付を変更して曜日を変更し忘れる、あるいは日付を変更し忘れることをやってしまいがちだ。このような更新作業も、Word の検索・置換の機能で可能だし、R から特定の日付を別の日付に変換できる。

いつそのことなら、日付を文書内で自動的に取得して日付あるいは曜日を更新できれば楽ができる。例えば、「2023 年 4 月 10 日 (月)」を 2024 年に変更することを考えよう。何番目の何曜日から日付が決まっているなら、2023 年 4 月 10 日は第 2 月曜日である。この場合は、2024 年 4 月の第 2 月曜日は「2024 年 4 月 8 日 (月)」なので、「2023 年 4 月 10 日 (月)」を「2024 年 4 月 8 日 (月)」に置換する。一方、日付固定なら「2024 年 4 月 10 日 (水)」に置換する。

さらに、求めた日が日曜日の場合は前日の土曜日あるいは月曜日にずらすとか、10 月 1 日の前後 3 日以内の火曜日のような法則でも可能である。祝日との関連で日付を決定することもあるだろう。そのようなときは、祝日データをあわせてコードに入れれば良い。とにかく、決め方が明確で 1 つに日付を決めることができれば、プログラムによる自動化できる。

ここでは lubridate を活用して、ワード文書の日付を更新する方法を扱う。lubridate で日付固定あるいは位置固定のときでの翌年の年月日を求める方法は以下を参考にして欲しい。

lubridate で日付・時刻を扱う

活用例

ワード文書内の日付は、正規表現を用いて入手できる。

それぞれの曜日なし版が考えられ、月と日が1桁の時に「04」のようにパディング (桁合わせ) されていることもあるだろう。これらは、正規表現によって対応可能である。もちろん、日付っぽい表記のすべてを含むことはできないが、よく使う日付表記は網羅できるだろう。年表記が2桁の場合、半角や全角のスペースを途中に含んだり、「()」の半角・全角の違いなどの表現揺れもあり得る。表記揺れを修正するための置換や削除などは、stringr(あるいは base) の関数で対応できる。

```
# 20\d\d年月日
# /

library(tidyverse)

## -- Attaching core tidyverse packages ----- tidyverse 2.0.0 --
## v dplyr      1.1.2      v readr      2.1.4
## v forcats    1.0.0      v stringr    1.5.0
## v ggplot2    3.4.2      v tibble     3.2.1
## v lubridate  1.9.2      v tidyr      1.3.0
## v purrr      1.0.1
## -- Conflicts ----- tidyverse_conflicts() --
## x dplyr::filter() masks stats::filter()
## x dplyr::lag()     masks stats::lag()
## i Use the conflicted package (<http://conflicted.r-lib.org/>) to force all conflicts to become errors

x <- "21年1月1日(月), 2021年1月1日(月), 2021年10月10日(月), 2月2日(月), 12月22日(月), 2021/1/1(月), 2021/10/10(月), 2/2(月), 12/22(月)"
regrep <- "((20)*[2-5]\\d+[年/_-]*)*\\d\\d*[月/_-]*\\d\\d*[日]*(\\([月火水木金土日]\\))*)"

stringr::str_extract_all(x, regrep)

## [[1]]
## [1] "21年1月1日(月)"      "2021年1月1日(月)"    "2021年10月10日(月)"
## [4] "2月2日(月)"          "12月22日(月)"        "2021/1/1(月)"
## [7] "2021/10/10(月)"      "2/2(月)"             "12/22(月)"
## [10] "21年1月1日"          "2021年1月1日"        "2021年10月10日"
## [13] "2月2日"              "12月22日"            "2021/1/1"
## [16] "2021/10/10"          "2/2"                 "12/22"
```

あとがき

この文章を執筆しはじめたのは、自分自身のためである。自分が面倒くさがり屋であることを自認しており、仕事上での作業の自動化をするようになっていたことがきっかけである。省力化をはじめると、省力化のための努力は惜しまない。その結果、度を越したのがこの文章である。心の中では密かに「手抜き本」と読んでいる。

2021 年頃に、初めての R パッケージとして moranajp (MORphrological ANALysis for Japanese) を作成していた。moranajp は、日本語の形態素解析のためのものであるが、内部では形態素解析ソフトである MeCab を使用しており、R からそれを呼び出している。その後、MeCab 以外にも Sudachi, Ginza, WebChamame などに対応できるようにしたが、結局は R からこれらを呼び出しているに過ぎない。この頃から、R から system() や shell() を使って Windows のコマンドを実行できることを知ることになった。つまり、Windows のコマンドプロンプトやバッチファイルでできることを、R から呼び出せることに最初は感動を覚えた。でもよく考えてみると、これは当然のことである。であれば、何でもとは言えないが、パソコンでできることはほぼ何でも R からできてしまうはずだと思って、色々と試すことが増えてきた。

さらに 2022 年から、BiSS (Biodiversity Investigation Support System) という植生や生物調査用のアプリの開発を始めた。それまでは、ほとんど R でしかプログラミングをしていなかったが、久しぶりに JavaScript

をさわるようになっていた。R と JavaScript では、お作法が異なっているため、最初は苦勞したが徐々に慣れてきた。BiSS 開発でブラウザの開発者ツールを使い始めて、HTML や JavaScript に慣れてくると、普段使っていたウェブページを JavaScript で操作できるのではないかと考えるようになった。さらに、自動化ツールである Selenium と R のパッケージである RSelenium を使って、R からウェブページの巡回や操作を覚えていった。その中では、JavaScript の知識も用いた。JavaScript と R のそれぞれの利点を活用しつつ、できるだけ最小限の労力で (省力化 = 手抜き) できるように考えた。

1 つのことができれば、また次も省力化 (手抜き) したくなる。ブラウザの自動化だけでなく、繰り返しのファイル操作、エクセル操作、PDF 編集などなど色々とできることを増やした。正直なところ、紹介したすべての機能を自分自身が使っているわけではない。一部の機能は執筆中に、こんなこともできるのではないかと考えて、CRAN で見つけたものもある。それでも紹介したうちの多くの機能は、きっと誰かの役に立つと信じている。

もちろん、そのまま使える機能は少ないだろう。それぞれの仕事・目的・環境に合わせてコードを修正して欲しい。また、汎用性のある機能であれば、GitHub にプルリクエストを送って欲しい。さらに欲を言えば、共同開発者になって欲しい。

matutosi/automater

みなさんがしっかりと手抜きできますように。